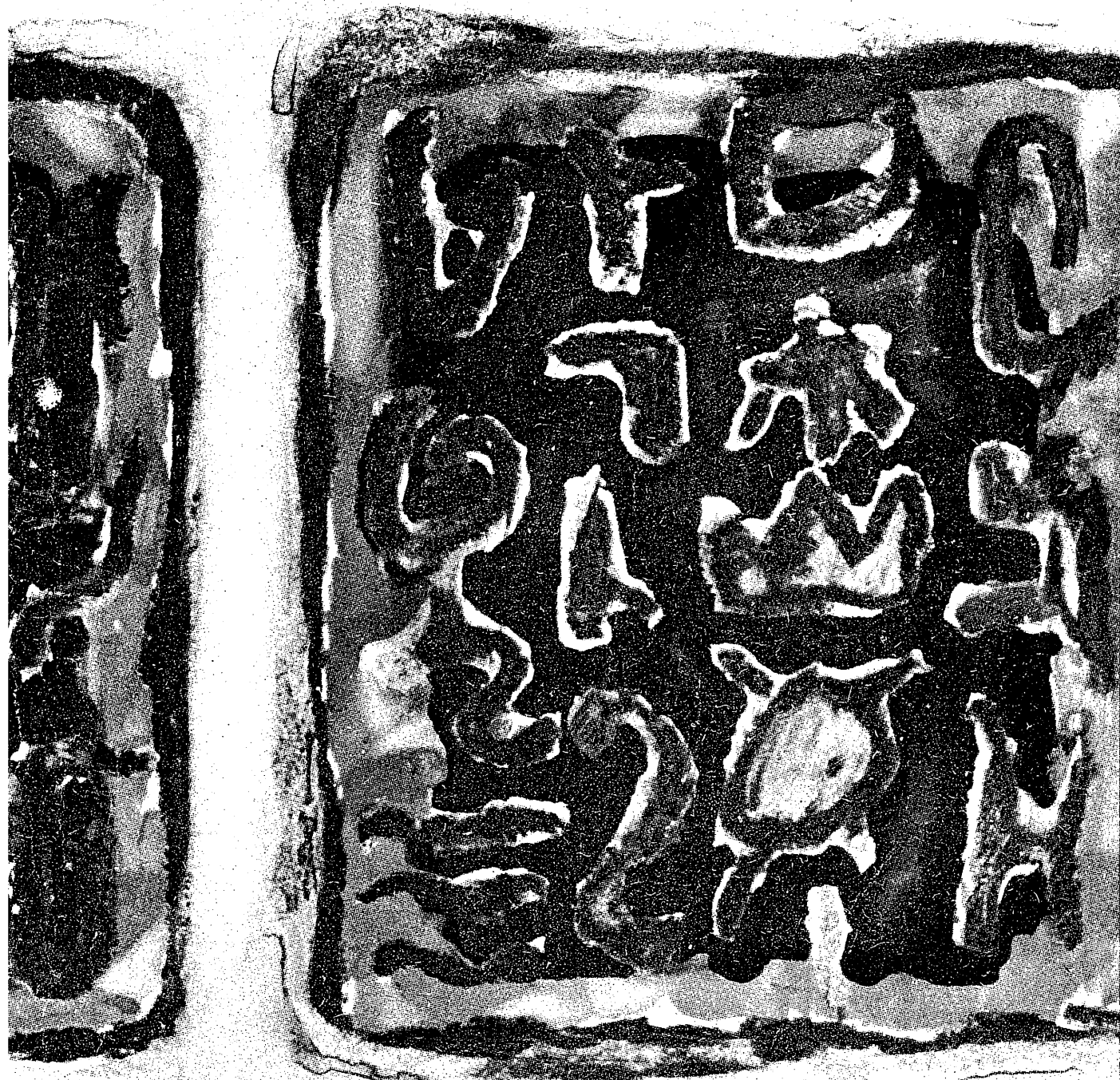


# 国語問題問答

第六集

国語シリーズ 37



文 部 省

## 刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものです。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編・国語教養編および資料編に分け、問題編は主として国語審議会の発表した事がらを、教育編は国語学習指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は一般の国語教養を高めることを、資料編は国語改善と国語教育に関する基礎資料を集録することを目的としたものです。

すでに教育編は12冊、問題編は10冊、生活編および教養編はそれぞれ5冊、資料編は4冊を刊行しましたが、各編にわたって今後もひきつづき刊行する予定です。

この「国語問題問答」は、国語の問題について、広く各方面から寄せられる質問にそのつどお答えしてきたものをもととして、毎年編集してきましたが、このたび、国語問題編の11冊目として、この第6集を編集しました。

なお、付録として、寄せられた質問に関連する参考資料として、三宅武郎文部事務官の執筆した「国号『日本』の読み方について」を収録しました。また、国語審議会話しことば部会の審議資料として、国語審議会委員・国際基督教大学教授西本三十二氏から提出された「外国人学生の感ずる日本語のむずかしさ」についての

資料を要約したものを収録しました。この資料は、主として同大学の外国人学生について意見を聞いたものです。

昭和 33 年 3 月

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

## 目 次

### 質 疑 応 答

|     |                 |    |
|-----|-----------------|----|
| 1   | ことばの問題について..... | 1  |
| (1) | 発音・よみ方.....     | 1  |
| (2) | 標 準 語.....      | 8  |
| (3) | 敬 語.....        | 10 |
| (4) | 官 庁 用 語.....    | 14 |
| (5) | 文 法.....        | 15 |
| (6) | 日本語教育.....      | 18 |
| 2   | かなの問題について.....  | 20 |
| (1) | かなの使い方.....     | 20 |
| (2) | かなづかい.....      | 22 |
| (3) | 送りがな.....       | 24 |
| 3   | 漢字の問題について.....  | 27 |
| (1) | 当 用 漢 字.....    | 27 |
| (2) | 教育漢字の学年配当.....  | 33 |
| (3) | 音 訓.....        | 34 |
| (4) | 字 体.....        | 39 |
| (5) | 筆 順.....        | 47 |
| (6) | 画 数.....        | 48 |
| 4   | 書式について.....     | 51 |

- 5 ローマ字について.....53
- 6 国語審議会について.....58

## 資 料

- 1 国号「日本」の読み方について.....67
- 2 外国人学生の感ずる日本語のむずかしさ.....98
- 3 昭和32年度国語教育研究協議会の記録.....99
- 4 国語シリーズ収録資料目録..... 107
- 5 「国語問題問答」(第1集～第6集)総索引..... 111

# 質 疑 応 答

## 1 ことばの問題について

### (1) 発音・よみ方

「しち」か「ひち」か

【問】 「七」「質」は「しち」がほんとうか、「ひち」がほんとうか。東京で「しち」というのはなまりではありませんか。

【答】 「しち」が正しいのです。大阪の電柱広告で「ひちや」とあるのを見かけましたが、あれは方言的発音によったもので、その土地ではそれで通用しているのですが、全国的共通を目的とする標準語としては、「しちや」と書くのが正しいのです。東京方言の「ひーし」のなまりは次のようなものです。

|          |     |        |
|----------|-----|--------|
| 東京方言のなまり | しと  | ひと（正）  |
|          | しとつ | ひとつ（正） |
|          | しばち | ひばち（正） |

「センセイ」か「センセー」か

【問】 わたしたちの話合いで次の二つの意見が出たのですが、どちらが妥当でしょうか。

「先生」「生徒」「映画」などの発音について：

- (1) これらにふりがなをするときには「せんせい」「せいと」「えいが」とふるのであるから、読みも〔センセイ〕〔セイト〕〔エイガ〕とはっきり読ませるべきである。
- (2) ふりがなは「せんせい」「せいと」「えいが」とふっても、読むときは自然に〔センセー〕〔セート〕〔エーガ〕と読むように指導すべきではないか。

【答】 このような字音語（漢語）の読み方について、現在、日本には、

- (1) はっきり〔センセイ〕と発音する地方と
- (2) 〔センセー〕をおもに、知らず知らず〔センセイ〕とも発音する地方

とがあります。それゆえ、一般的にいて、表記は「せんせい」であるが、発音は〔センセー〕から〔センセイ〕までの幅を認めて、生徒の自然の発音にまかせる（ぜひこうでなければならぬとはいわない。）というのが妥当な態度ではないでしょうか。大勢としては〔ei>ê〕の方向にあることは認められますが。（参考：ある外国人は〔ê〕を発音しにくいといい、ある外国人は〔ê〕を発音しやすいといいます。）

この点をやかましくいうのは、字でいえば「木」の縦棒のはねをやかましくいて、それを「正・誤」の対象とするのと同じ趣があります。

「木」の字のはねは、筆勢による連綿であって、その字で

必ずはねなければならないということはないのですから、これははねなくても、また自然の筆勢ではねがついても、どちらも正しい木の字です。そのように、「先生」は〔センセー〕でも〔センセイ〕でも、ことばとしての「正しさ」は失われないわけです。

### ダ行音の語とラ行音の語の使い分け

【問】 長崎県（彼杵郡式見）の漁村ですが、ダ行音とラ行音との使い分けに困難を感じるこどもが多くて困ります。テープにとったりなどしていろいろ苦心するのですが、どうしてもできないらしいのです。その点で優秀児も卑屈になる傾向も見えます。適当な教育方法はないものでしょうか。

【答】 〔d〕と〔r〕とは同じく舌先を使って出す、よく似た音ですから、その区別をはっきりさせることがむずかしく、そうした地方は他にもあります。たとえば島根県など。

一般に発音の教育には、何よりも気長にやることがたいせつです。

〔d〕は、舌先を上あごの歯ぐきの裏から離すときに少し重くし、〔r〕は反対に軽く「はじく」という気持でやってみてください。

〔d〕を閉鎖音（とじ音）または破裂音といい、〔r〕を弾音（はじき音）というのは、そうした発音上の気持を表わ

したものです。

なお、発音の教育には、第1に耳からの聞き分けをまず卒業させ、第2に「かな」または「ローマ字」での書き分けを卒業させ、それから第3に発音上の区別に導いていくのが順序だとされています。

### 連声について

【問】 教科書に「反応」「順応」「感応」とありますが、これらは「反のう」「順のう」「感のう」と書くべきであると思いますが、どうですか。

【答】 「皇」には「こう」と「おう」との二つの音があげてあり、その「おう」を「天皇」では「てんのう」と読みます。このような現象を「連声」と申します。いわゆる「連濁」も広い意味での連声です。

「反応」の「はんのう」もこれと同じですから、それでさしつかえありません。

### 「落ちる」と「落っこちる」

【問】 「落ちる」を東京で「落っこちる」といいますが、標準語でしょうか。

また、それはどうしてそういうようになったのでしょうか。

【答】 標準語とは、いつ、どこで、だれが、だれに向かって話してもよく、全国的に共通で、対外的には日本語を代表することばをいうのですから、「落ちる」を「落っこちる」というのなどは標準語とはいえません。

つぎに、なぜそういう言い方ができたかというに、それは関東ぶりの強める言い方なのです。

では、なぜ「落ちる」が「落っこちる」になるかということについては、これまで二つの説があるようです。

- (1) 「落-ちる」を強く息をつめて言うために、その間に「こ」がはいって「落っこちる」となるのだという説と、
- (2) 「落ちる」のあたまへ「おっ」と息をつめて言うので、それを「落ちる」の〔o〕に〔k〕音がついて〔ko〕と受けとめたのが「おっ kotiru」である。すなわち「おっこちる」は「落っこちる」でなくて「おっ<sup>こ</sup>落ちる」なのだという説です。

### ギリシア・ペルシアの発音

【問】 国語シリーズ27「外来語の表記 資料集」に記載されている記事について質問します。

53ページにギリシア（Greece）とありますが、それはほんとに「ギーリーシーア」と発音させるつもりですか。語尾の“-ia”は〔ア〕と読ませるという原則に引かされたものと思われませんが、不自然です。ペルシアは記載がありませんが、

ある教科書に用例がありました。

【答】 1 : 「ギリシア」は、いちおう〔ギリシア〕と発音するつもりです（3音節の〔ギリシャ〕でなく）。ただし、最後の〔ア〕は、「わたり」で〔ヤ〕、または〔ヤ〕に近くなるのは普通の音声現象ですから、そのへんは自然にまかせて発音することになると思います。ペルシアも当然です。

2 : それは「不自然だ」という御感想は「発音」についてのことと了解しますが、それは〔ーア〕をはっきりと〔ア〕と発音しようとするればそうですが、上述のように「わたり」音の自然性を尊重すること、および〔ギリシア〕でなく〔ギリシ<sup>ー</sup>ア〕と平ら型に発音する（それが自然である）ことによって、いくぶんでも不自然な感じを取り除かれると思いますがいかがでしょうか。

3 : おって、御承知のとおり「ギリシア」は Graecia からきたものと考えられており、そのの逐字訳からはじめ「ーシア」、後に「ーシャ」、さらに今日ではふたたび「ーシア」に帰っていくという動向にあるかと思われます。つまり、表記面では原つづりの字面が強くものをいうわけです。

### アクセントの指導

【問】 国語科においてアクセントの指導をもっと重視する必要はありますか。

わたしは、アクセントも直せば直る。ラジオの普及がそれを助ける。交通の発達と、いろいろの全国的な催しが多くなるに伴い、語法・アクセントの共通化を促進する必要があると思うのです。

【答】 ことばは必ず発音を伴い、発音は必ずアクセントを伴っているのですから、その教育の必要なことはお説のとおりです。ことに新しい理念における音読の教育においては、いっそうそのことが強く感じられましょう。ただ、その指導方法がたいせつなので、その点、慎重に研究・くふうすることが必要です。

戦前の国定教科書では、第1に同音語をアクセントで言い分ける語いについて注意し、それらはいちいち教師用書に示してありました。たとえば「橋のハシ」と「箸のハシ」など。おそらく、このへんがアクセント教育の最低線ではないかと思えます。

つぎに、これらのアクセントについても、東西の2大方言系統で逆になっているのがありますから、そのちがい（まちがいではない）について相互に自覚しておくことが、ただちに国民的な相互理解の場を広めることにもなるので、この点が第2に注意すべきところでしょう。

## (2) 標準語

「わたし」と「わたくし」

【問】 「わたし」と「わたくし」と、どちらが一般的でしょうか。

【答】 国語審議会から建議された「これからの敬語」に、

1) 「わたし」を標準の形とする。

2) 「わたくし」はあらたまった場合の用語とする。

とあります。(実際にもだいたいそうだと思います。)

これまで英語の “I” にあたる日本語は何かと問われて、だれでもちょっととまどっていたのですが、これからは言下に「わたし」だと答えられるようになりました。

“you” に対する「あなた」でもそうです。

「川原」は「かわ-ら」か「か-わら」か

【問】 「川原」を「かわら」というのは、「かわーら」と解釈すべきでしょうか、「か-わら」と解釈すべきでしょうか。

【答】 「川」を古く kafa といっていた時代を想定してみますと、kafa-fara—kawa-wara—kawa-ara—kawâra—kawara というふうになったと考えてはどうでしょうか。したがって、「か-わら」よりも「かわ-ら」と考えるほうが妥当かと思

ます。このような例は、「はいる」を hafi-iru—hawi-iru—hawiru—hairu と考えて、旧かなで「はひる」書くのと同じ類でしょう。

### 「ニホン」に一定せよ

【問】 「日本の国名は憲法制定のときニホンと決まったのに、一般にまだニッポンと呼ぶのは国名が不安定で実に遺憾である。善処を願います。

【答】 ニホンというのは憲法制定のときに決まった、いわば既定事実のように思っているようですが、そういう事実はなく、当時の金森国務大臣から、昭和21年7月12日の第10回帝国憲法改正特別委員会で次のように述べています。

（前略）随テ今オ答ヘ致シマストコロハ、今日ノトコロデハ何トモハツキリ決メテ居リマセヌ。ドチラデモヨロシイ。

また、戦争中はニッポンで、戦後には平和国家として、ニホンということになったと考えている人もあるとみえて、実際にそういう質問を受けたこともあります。そういう事実もありません。これについては付録の「国号『日本』の読み方について」を参照してください。

### (3) 敬 語

#### 「お」のつけ方

【問】 おの字について質問します。ラジオを聞いても、雑誌を読んでも、人と会話しても、こんなことばには「お」をつけないでもいいだろうにと思うことばに、高い教育を受けた女性や学校の男女教員その他の人が「お」をつけて使っています。国語審議会では、「お」をつけて使ってよいことばといけないうことばはどんなに審議しているのですか、教えてください。

「お」をつけなくてもいいようなことばに「お」をつけて使うため、よく理解できないときがあるのです。たとえば「おみかん・おりんご・おにんじん・おだいこん」などは、かんで理解できますが、「お外に行きましょう。」その他すぐには理解できないことばがあるのです。固有名詞にまで「お」の字をつけるのです。

【答】 「お」のつけ方について、たいへんよいところへお気づきになりました。

「お」の字をつけすぎるので、それを反省してほしいということは、国語審議会では昭和27年に発表しました。「これからの敬語」の中の第4項の

#### 4 「お」「ご」の整理

- (1) つけてよい場合
- (2) 省けば省ける場合
- (3) 省くほうがよい場合

の例などがそれです。「これからの敬語」は「国語問題問答第3集」にのっています。

もともと「お」をたくさんつけはじめたのは、むかし京都で宮中に仕えていた女官たちからなので、今でも女性のことばに多く残っています。ですから、これからも女性が主となって反省する必要があります。

それについて、幼稚園の女の先生に気をつけていただきたいということを、「これからの敬語」の中に

## 9 学校用語

- 1) 幼稚園から小・中・高校に至るまで、一般に女の先生のことばに「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう。たとえば

(お) 教室 (お) チョーク (お) つくえ

(お) こしかけ (お) 家事

といってありますが、なお31年には話しことば部会の報告として、「話しことばについて」を発表し、その中の第2項「話しことばの教育」の中で次のように述べてあります。

幼稚園で使われることばに、たとえば「帰りましょう」を「お帰りしましょう」とか「絵をかきましょう」を「お絵かきしましょう」というような言い方があり、その改

善についてはすでに一部では有益な研究が行われているが、幼稚園教育のきわめてたいせつであることにかんがみて、なお全国的に研究を進められたい。

この「話しことばについて」の全文は、「国語問題問答第5集」にのっています。

### 「申す」

【問】 わたしは、これまで目上の人に対して「母もこのように申しておりました。」と申しておりましたが、あやまりでしょうか。

【答】 「申す」は、古書に「<sup>まう</sup>奏す」「<sup>まう</sup>白す」とも書いてあるように、原義は目上に対する敬語に限っていたのですが、今日ではいまひとつ別の意味ができました。それは「言う」ということの上品語に使うのです。

(1) 原義の敬語としての用例

○申し上げます。

(2) 転義の上品語としての用例

○お申し越しのこと

これは「仰せ越し」ともいいますが、普通は「お申し越し」のほうを使います。

○お嬢さんによろしく。

ありがとうございます。よく申し伝えます。

○先生：お子さんには、やはり一言注意しておいてください。

父兄：よく申しきけます。

「お申し越し」と「お申しいで」

【問】 「申す」は自分をへりくだってという敬語ですから、「お申し越しのこと」とか「お申しいでください」というのは失礼になるのではないのでしょうか。「仰せ越しのこと」「仰せいでください」というのが正しいのではないのでしょうか。

【答】 確かにそういうことになるわけですが、ただ、「お申し越しのこと」「お申しいでください」はすでに一般の通用となって大衆的に耳なれた慣用語句になってしまっていると考えられますから、これは標準的な語法として認められることになるでしょう。

ただし、「仰せ越しのこと」ということは、今日でも使えるりっぱな敬語法だと思います。

「仰せいでください」はかえっておかしく聞こえましょう。「仰せいで」という言い方は、戦前、宮廷用語として「仰せいだされました」と言いました。

以上、「仰せ越し」「お申し越し」「お申し出で」などは慣用語句として使うが、その他では「申す」を相手の言うことに使うのは誤りだというのが現代社会の通念です。ですか

ら「あなたが申されました。」というのは誤りで、これは「あなたがおっしゃった。」と言わなくてはなりません。

なお、次のような「申す」も本義を離れて使われています。

どうぞ、奥さんによろしくお伝えください。

(このとき「よろしく申してください」は誤り。)

ありがとう。申し伝えます。

これは「いい伝えます」では伝説みたいな意味になるので、それを避ける心持からきたものであるかも知れません。

#### (4) 官 庁 用 語

やわらかい官庁用語にしてほしい

【問】 官庁から出される文書には味のない、親しみにくいものが多いようですが、何とかもうすこし、わたしたちが日常使っているような、やわらかい話しことばに近づくように改められないものでしょうか。尊敬語を使わないまでも、せめていいねい語ぐらいは使っても決して意味を不鮮明にすることもありますまいし、また、一般社会のことばづかいの指導にもなることと思います。

【答】 官庁の文書が固いというのも、けっきょくは起案者によるものであって、官庁から出る文書の全部が全部固いものばかりではないと思います。この方面のことについては、「公用

文作成の要領」というものが政府から出ています。一般に起案者はそれによって感じのよい文書を作ろうとずいぶん努力しているのです。「公用文作成の要領」によりますと、たとえば文章は「原則として『である』体を用いる」としてあります。これは「なり」や「候」などの文語体をやめて、口語体で書くということを表わしたものです。また、「ただし、公告・告示・掲示の類、ならびに往復文書（通達・通知・供覧・回章・伺・願・届・申請書・照会・回答・報告等を含む。）の類は、なるべく『ます』体を用いる。」というような規定もあります。したがって、書式の改善に伴って、たとえば  
御許可願います。

というような許可願に対して、

許可する。

というようなちぐはぐな回答もおいおいなくなりました。

## （５） 文 法

### 「ある」の活用の種類

【問】 口語の「ある」は、未然形で「あらない」とはいいませんから、変格活用だと思います。それを五段活用とした教科書があるのはどうでしょうか。

【答】 文語で「あり」を変格活用といったのは、その終止形を

「あり」といった1点によるのです。ところが口語ではそれを「ある」というようになって、普通の五段活用と同じになったのですから、文語で変格活用といった理由がなくなりました。それで大きく五段活用の同類にはいったものとして取り扱ったのでしょう。それに、敬語で「あられる」とか「あらせられる」とかの言い方もありますから、「ある」にまったく未然形がないとはいえません。ただ、打消の「あらない」という形がないだけです。

一般に活用表は類型的なものであり、すべての語に、すべての活用形やその用法がもれなくそなわっているというわけのものではありませんから、「ある」においても、打消の「あらない」は「ない」で代用するというふうに注意しておけばよいのではないのでしょうか。

### 「に」と「へ」

【問】 「水の中へしっぽを入れておくと」「しっぽを水の中に入れたまま」また「門の中へはいります」「門の中にはいっていきました」など、「に」と「へ」の使い方について教えてください。

【答】 「に」と「へ」とには、はっきりと用法を異にしている面（例1）と、そうでなく混用している面（例2）とがあります。

例1 ○ここにいる。(×ここへいる。)

○あちへ行け。(×あちにに行け。)

例2 ○山にのぼる。

○山へのぼる。

多くの例を見わたして、だいたい、文語的伝統で「に」と言うべきところを口語で「へ」と言うことが多くなっています。その理由についてはいろいろ考えられていますが（たとえば舌頭音の退化現象の一つと見るなど）、まだ学界の定説はありません。

お問合せの例は、第1例を除いて、上の例2のほうなので、その適用は、ただ文の調子によったものでしょう。したがって、どちらもまちがいではないと思います。

第1例は、「水の中へしっぽを入れておく。」の下線のよ  
うに続くと考えるときは、「に」とするのが妥当でしょう。

### 「できるかぎり」の品詞

【問】 「できるかぎり」という語の品詞について次の二とおりの意見が出ました。

(1) 副 詞

(2) 動詞＋形式名詞

【答】 語句構成上は(2)のとおりですが、それを一つのまとまった語句としては副詞（または副詞相当句）です。そして、これ

は「できるかぎり（において）」の省略だと考えてよくはないかと思います。

## （6） 日本語教育

### 日本語のむずかしさ

【問】 日本語は、外国人にとってむずかしいというようなことを聞くことがありますが、それはどういうことですか。

【答】 教育上や社会生活の上から、国語の書き表わし方の複雑なことが問題となって、それを解決するために、国語政策が実施されてきています。しかし、他の言語と比べて、日本語がむずかしい言語かどうかを決めることは、容易ならぬ問題です。

他国の言語は、だれにとってもむずかしいものです。その中で、日本語が特にむずかしいかどうかという問題なのですが、一般には、日本語は、いちおうの話をするだけならやさしい習いやすい言語であるが、正確に話すとなると、助詞や助動詞などの使い方が微妙で、男女・年齢・社会関係・身分のちがいによって言い方が異なるので非常にむずかしく、まして世間普通の漢字かなまじり文の読み書きとなると、学習のきわめて困難な言語だといわれています。

こういう点について、外国人学生が実際にどう感じている

か。国際<sup>キリスト</sup>基督教大学で調査したものがりますので、資料としてあげておきました。資料2「外国人学生の感ずる日本語のむずかしさ」をごらんください。

## 2 かなの問題について

### (1) かなの使い方

「三ヶ年」か「三か年」か

【問】 教科書では「三か年」と書いてあるところを、読み物によっては「三ヶ年」と書いてあるものがあります。「ヶ」はかたかなの「ヶ」なので、こどもは「三け年」と読みます。「ヶ」は「か」と読む漢字ですか。

【答】 もとは「个」と書いた漢字で、音は「カ」です。「竹」の字の片方で、「箇」の字のもとです。

そういう字で、「三ヶ年」の「ヶ」は漢字のつもりで書きはじめられたのかかもしれませんが、今日では漢字とは考えられないので、「三ヶ年」は「三か年」と書くように公用文では決まっています。それを「ヶ」で書くのはまだこれまでの習慣が残っているので、おいおいに改まることと思います。

鳴き声の「ブーブー」

【問】 ぶたの鳴き声などの「ブーブー」は、どう書くのがよいでしょうか。

【答】 かたかなでは「ブーブー」と、ひらがなでなら「ぶうぶう」と書くのがよいと思います。（さらに「ぶーぶー」と書いても必ずしも「誤り」だとはいえません。）

人間が「ぶうぶういっている」というほうには「ぶうぶう」がよいと確言することができますが。

「ウインドー」か「ウィンドウ」か

【問】 辞書によっては「ウィンドウ」とありますが、そういうふうに教えるのでしょうか。

【答】 ウィンドウ (window) というのは英語の発音に近くかな書きしたのであって、外来語としてはウインドーと書く（ウィンドウとは書かない）ことに国語審議会の案ではなっています。（国語シリーズ27「外来語の表記 資料集」14ページ参照。）

「オホーツク海」「カムチャッカ」「ウオツカ」

【問】 「オホーツク海」と「カムチャッカ」と「ウオツカ」の正しい発音と書き方はどうなのでしょう。

【答】 (1) 「オホーツク」の「ツク」は原語で〔-tsk〕の発音ですから、その「ツ」を大きく書きます。「ツ」を1字だけ離していえば〔tsu〕ですが、「ク」に続くと自然に〔tsk〕とな

ります。

(2) 「カムチャッカ」と「ウオツカ」の「-ツカ」は、原語の発音で「-tka」ですから、「ウオ-ツカ」でも「ウオツカ」でもありません。むしろ「ウオトカ」と書いて、その「ト」を軽く言えば原語により近く聞えましょう。

が、日本語の中に取り入れた外来語としては、「ウオツカ」でも「ウオッカ」でも「ウオトカ」でも、とにかく標準の書き方なり読み方なりをきめればよいのであって、その点、外国語の勉強とはちがうわけです。国語審議会の部会報告（国語シリーズ27「外来語の表記資料集」所収）には、「ウオツカ」とあります。

「カムチャッカ」の「-ツカ」も「ウオツカ」の「-ツカ」と同じで、すなわち「-tka」ですから、これも「カムチャトカ」とか「カムチャツカ」と書いてよいところですが、明治以来、多くは「カムチャッカ」と書いてきました。こうした外国地名の書き方および発音についての標準を決定することは、明治以来、文部省としても久しく努力してきたところであり、また今日でも努力しています。

## (2) かなづかい

### 2 語連合ということ

【問】 「現代かなづかい」の第3項の「ただし書き」の(1)に、

二語の連合によって生じたぢ・づは、ぢ・づと書く。  
とありますが、それならば「地震」も「ぢしん」と書くべき  
でしょう。これも2語の連合によって生じた「ぢ」です。た  
だ、上に來たか下に來たかのちがいだけであって、2語の連  
合によって生じたぢである点は同じです。この点が新かなの  
最も理解しにくいところで、われわれのグループではみなそ  
ういっています。

【答】 2語の連合によって生じた「ぢ・づ」というのは、その2  
語の中での下につく語の頭が、1語では「ち・つ」であるも  
のが、その上に他の語がついて「ぢ・づ」となった場合だ  
けをさすのです。すなわち「○-ぢ」「○-づ」というふう  
に。

|   |    |      |
|---|----|------|
| 例 | -血 | 鼻-血  |
|   | -月 | 三日-月 |

この「血」や「月」が上につくときには決して「ぢ」や「づ  
き」にはなりません。

「地震」はどうかと申しますと、その「地」に元来「ち」  
と「じ」との2音がそなわっているので、上についても「じ」  
だというわけです。下でも同じく「じ」なのです。

もっとも、その「じ」は、旧かなづかいでは「ぢ」と書く  
のですが、それを現代かなづかいの第3項の

「ぢ・づ」は「じ・ず」と書く。

というきまりによって、あたまから「じ」と書いているわけ

です。

「がっかい」か「がくかい」か

【問】 「学会」は「がくかい」と書くべきか「がっかい」と書くべきか。

【答】 「がっかい」と書きます。すべて「つまる音」は「っ」と書くというのが現代かなづかいのきまりです。

### (3) 送 り が な

「返えす」「帰えす」か「返す」「帰す」か

【問】 「返えす」「帰えす」という送りがないをよく見ますが、それを認めていいのでしょうか。

【答】 「返す」「帰す」がむしろ正しい送りがないだといっていいでしょう。これを「返えす」「帰えす」と書くべき理由はありません。しいていえば、「<sup>き</sup>帰す」と読まれるおそれがあるといえはいえませんが、それは弱いようです。ことに「<sup>へん</sup>返す」などということばはないので、「返す」にはそれもあてはまりません。

## 「聞える」か「聞こえる」か

【問】 ある教科書には「聞こえる」とあり，ある教科書には「聞える」とあります。また辞書には「聞える」とあります。教育上困っていますから，現代かなづかいとしてはどちらが正しいか，お答えください。

【答】 これは「送りがな」の問題であって，「かなづかい」の問題ではありませんから，「現代かなづかい」にはこれについての規定はありません。

送りがなについては，現在のところでは，いちおうこちらのほうを標準としようといっても，そうでなければ「誤り」だということはできない段階にあります。

それゆえ，現在のところ，「聞える」でも「聞こえる」でも，ともかくその教科書の全体に統一があれば検定は通ることになっていますので，それでお示しのような結果になるのです。ただいま国語審議会で審議中ですので，結論が出れば，しぜん各教科書の送りがなも原則的には統一されることになると思います。

現在のところでは，

第1に自校で使っている教科書によって教えていくこと，

第2に，必要に応じまたは機会をみて，他の方式もある  
ということをお教えること

が必要と思います。たとえば、「聞こえる」と教えておいて、「聞える」とあるのをみても、必ずしもそれは「こ」が落ちているのではないということを了解させておくべきです。

「生まれる」か「生れる」か

【問】 「生まれる」は「生れる」でよいと思いますが、近来は教科書一般に「生まれる」とあります。その理由はどこにありますか。

【答】 お説のように「生れる」でよいわけで、現在、社会で広く通用しています。

が、一面、「生む」「生まれる」とならべて考えて、むしろ「生まれる」と書きたいという要求もあります。教科書の「生まれる」という書き方は、その線にそっているのです。

### 3 漢字の問題について

#### (1) 当用漢字

「猿」の字は必要である

【問】 動植物の名はかな書きにするという原則を立てながら、当用漢字表には「犬」や「牛・馬」などがある。それならば「猿」はどうか。「猿人」「類人猿」など絶対必要な熟字と思われます。

【答】 動植物の名をいちいち漢字で書くことは、国民の日常の言語生活として不必要なことなので、動植物の名をかな書きにするという原則がうち出されたのです。だからといって、「犬」とか「牛・馬」などは、「いぬ」「うし」「うま」と読む以外にも日常のことばとしても使うことが多いので残しておく。これに反して、「猿」は「さる」でよく、「類人猿」などは専門的な用語であって、国民の日常用語というわけのものではありませんから、それらは別に学術用語としての処置があるはずです。(文部省編「学術用語集 動物学編」では、「さる類 (Simiae)」「ひとにざる科 (Anthropoidae)」というように決めてあります。)

## 「交差点」と「交差点」

【問】 「又」の字が制限されたのですから、わたしは「交差点」とかなで書くのがほんとうだと思っています。それを「交差点」と書いている辞書があり、また学校によってはこれを生徒に使わせています。この点、どちらがよいですか。

【答】 当用漢字表にない字はかな書きにするのが第1の原則的方法ですが、第2の方法としては、もとの字とあまり意味のちがいのない漢字を代用することもありうるわけで、それを書きかえといっています。第3の方法は言いかえであって、たとえば「瀆職」を「汚職」，「溺死」を「水死」にしたようなものです。

「交差点」は上の第2原則を適用したもので、これならば「差」に「入りちがう」という意味もあることだからよからうというので、すでに国語審議会でも認めているものです。そのことは「同音の漢字による書きかえ」の中にのっています。（この「同音の漢字による書きかえ」の全文は国語シリーズ35「現代かなづかいと正書法」の中にのっています。）

物理学の学術用語としては、「交さ結合」「交さコイル」の書き表わし方をしています。なお、「おんさ」のように、全部かな書きにしているのもあります。詳しくは、文部省編「学術用語集 物理学編」を見てください。

### 「受験番号」か「受検番号」

【問】 大学・高校の入試は、公的な書類の上では「学力検査」といっていますから、それに応じて「受検番号」と書くべきでしょうか。

【答】 「試験」のことを、ある時代には「考査」といったり、ある時代には「検査」といったりしてきましたが、それに依じていちいち「受験」「受検」「受査」ということも一つの行き方ですが、一面、それらを通じて「試験」という語であらわされているのが社会一般の常識ですから、それに基づいて大らかに「受験番号」と書いてもよいと考えてはどうでしょうか。

### 「刺げき」「率直」か「刺激」「卒直」か

【問】 ある教科書には「刺げき」「率直」を「刺激」「卒直」と書いてありますが、これらは広く社会に通用しているものでしょうか。

【答】 「刺激」は、昭和 31. 7. 5 の国語審議会報告「同音の漢字による書きかえ」の中で認めています。

「卒直」はその中にありません（率の字が当用漢字表にあるからです）。が、この用例も以前から見受けていますから、これで一般に目なればよいと思います。もともと「率直」

と書いても、字原からいえば借用です。すなわち「率」の字原的意味は「鳥をとるあみ」のことで、それを「ソツ」という音にあてて使ったのですから、さらにそれを簡単な「卒直」で通用することもよいでしょう。

「水牛」や「金魚」もかな書きがよいのか

【問】 当用漢字表の使用上の注意事項(ホ)に、動植物の名称はかな書きにするとありますが、では「水牛」や「金魚」などもかな書きにするのがよいのですか。それとも当用漢字表にある字なら漢字で書くのがよいのですか。

【答】 動植物名などは、当用漢字表にある字でも、なるべくかな書きにすることが望ましいのです。「きんぎょ」も「すいぎゅう」も、動物の和名としては、やはりかな書きが原則です。ただ、その文章における用字の調和上、これくらいなことは漢字で書きたいというような場合があります。そういうときには「金魚」「水牛」でもさしつかえありません。

「充分」と「十分」と「じゅうぶん」

【問】 「充」も「十」も「分」も当用漢字表にありますから、「充分」とも「十分」とも書いてよいと思いますがいかがでしょう。

【答】 「じゅうぶん」は副詞ですから、なるべくかな書きにするという「当用漢字表」まえがきの精神によって、公用文でも教科書でもかな書きとしてあります。

一方、「十分」は時間の「十分」とも同じ字面になりますから、いっそう避けたいところです。

「絶たい絶命」は「体」か「対」か

【問】 わたしは中学3年生ですが、あれこれ調べてみてもどうしてもわからないので質問します。「絶たい絶命」の「たい」は「対」でしょうか「体」でしょうか。

【答】 「体」です。

大言海・大日本国語辞典には、この「絶体」も「絶命」も、ともに古い星占いからきたことばだということが説明してあります。「絶体」も「絶命」も同じ意味のことばで、「命」に応ずるものは「体」のはずです。

辞書には、みな、「絶体」の中に入れて「絶体絶命」、また単独にも「絶体絶命」として出してあります。

「回復」と「快復」

【問】 病気の「かいふく」はどう書きますか。

【答】 「かいふく」という漢語には昔から「回復」と「恢復」と

があります。その意味はすべて物事が「もとのような状態にかえること、またはかえすこと」です。そのうち「恢復」の「恢」は字がむずかしいので当用漢字にも採用されていませんから、これからはすべて「回復」と書きます。

そこで、病気にも「回復」でよいのですが、特に「快復」と書くことが世間で行われていますから、手紙文などでこれを使うこともよいことです。

### 「初」と「始」との使い分け

【問】 「初」と「始」との使い分けを教えてください。

【答】 「初」は、ふつう、事物の起原を「はじめ」というときに用います（名詞）。

それから引いて接頭語に用います。それが「はつ」です。  
たとえば「<sup>しよにち</sup>初日」「<sup>はつひ</sup>初日の出」「<sup>はつほ</sup>初穂」など。

動詞には、ふつう「始」の字を使います。たとえば「開始」「始業」など。

しかし「始」と「初」との厳重な書き分けはむずかしく、古書にも両用した例がありますから、今日の用字法としては、上のような熟語の例を参考として使うよりほかはありません。

当用漢字音訓表では、「初 ショ はじめ・はじめて・はつ」「始 シ はじめる」のようにその音訓を認めています。したがって、副詞の「はじめて」は漢字を用いては「初めて」

と書きますが、なるべくかな書きにします。

## (2) 教育漢字の学年配当

### 音 訓 の 配 当

【問】 文部省で漢字の学年別配当をされたことは、たいそうけっこうなことと思います。しかし、残念にも音訓の配当がなされていけませんので、使用上不便を感じます。文部省では、今後音訓の配当もされる計画でしょうか。それともこのような研究は、地方の教育研究所あたりですべきでしょうか。

【答】 お問合せの第1の問題、漢字の音訓の学年配当について、現在文部省としては積極的に直ちにその調査をする計画はありません。この問題に関しては、多少、報告書「教育漢字の学年配当」で触れておきましたので次に引用しておきます。教育研究所等でなさるとすれば、すぐに配当を目標とする調査にかかるというよりは、各種音訓使用の精密な実態調査が、有益なものとなるのではないかと考えられます。

このようにして具体的な各字の指導開始の時機が定まったとして、次に考えなければならないことは、漢字の指導というのは、実際には、それぞれの字によって表現されることばの指導だということである。たとえば、「兄」という字は、「あに」ということばによって指導され、「康」という字は

「健康」ということばによって、最初の指導がおこなわれる。したがって、字種の学年配当は、実質的にはその字によって表現される最も代表的な漢字の用法の初出学年を規定しているのである。むろん、代表的な用法あるいは基礎的な用語の選定に迷うばあいも少なくない。それは、漢字の学年配当が必ずしもことばの学年配当ではないことの当然の結果である。しかし、そのさいのために漢字学習指導研究会は、「教育漢字の学習指導語例集」を作成して、指導の参考に供することとしたのである。だから、それぞれの漢字について、どんなことばで初出させたらよいか、あるいはどんなことばを読み替え語として出したらよいかなどについてのおおよその範囲が自然にきまっていることを、この指導語例集によって承知することは指導者の義務であろう。しかし、教育漢字学年別配当表は、初出語形や読み替え語の提出時機などについては、別に制約を設けていないのであることをも、同時に知る必要がある。（2 指導の方法について——「教育漢字の学年配当」177～178ページ）

### （3） 音 訓

#### 「学」の 音 訓

【問】 「学」の字には「ガク・まなぶ」と音訓表に示されていますが、実際には「学校」で「ガッコウ」となります。その

ガッの音をも音訓表の中に入れて示されたかったと思いますが、どうでしょうか。

【答】 ごもっものご意見であり、現代かなづかいの条文や例はそのたてまえになっていますが、当用漢字音訓表では、その意味のことを「使用上の注意事項」に書いて、いちいちの字については基本の音を示すことにとどめてあります。それゆえ実地の適用にあたっては、

学校 は がっこう（がくーがっ）

日記 は にっき（にちーにっ）

力行 は りっこう（りきーりっ）

または りょっこう（りょくーりょっ）

となる、というふうにお考えください。

「みずから」と「おのずから」

【問】 「自ら」を、音訓表で「みずから」だけにした理由。「お

のずから」「みずから」と両方の訓のあるほうが、

おのずからそうである 「自然」

おのずから明らかである 「自明」

などの熟語の解釈に便利ですが。

【答】 「自ら」と書いても「自から」と書いても「自ずから」と

書いても、「みずから」であるか「おのずから」であるかわ

からないので、古人は一策として「<sup>ミ</sup>自ら」「<sup>オ</sup>自ら」というような迎えがなをくふうしました。それよりもいっそ両方ともかな書きにすればよいという説の「中」をとって、「みずから」という「訓」だけが残りました。

それでも「おのずから」は「意味」として残っています。したがって「自然」「自明」もそれで解けるわけです。

### 音訓と熟語のときの意味

【問】 「優」の字には「やさしい」の訓だけを認めてあるが、それでは「まさる・すぐれる」という意味で「優勝」「優秀」「優等」「優越」などの熟字が使われなくなって、ひじょうに困ります。また人名の適用上でも困ります。

【答】 漢字のもっている要素として、中国では「形・音・義」の三つが数えられますが、日本では、その「義」が訓（読み）と義（意味）との二つに分化して、けっきょく日本における漢字の要素は「形・音・訓・義」の四つになりました。「優」には、「やさしい」という訓だけしかなくても、やはり「やさしい」のほかに「すぐれる・まさる」という意味もあるのですから、りっぱに「優美」にも「優秀」にも使われます。

なお、人名としては「<sup>まさる</sup>優」という読みもさしつかえありません。新しく生れる子の名の漢字の字体については、法務省の指示によって、当用漢字表（簡易字体を含む）、人名用漢

字別表の字体によることになっていきますし、当用漢字字体表については、それによることが好ましいとされていますが、当用漢字音訓表は適用されていません。

「入」に「はいる」の訓はいらないか

【問】 「入る」を「はいる」と読むことはりっぱな慣用訓です。

それを音訓表で認めなかったのは、たぶん「這入る」の語原的意味を考えたのではないか。それならば思いすごしですから、これを復活して使うほうが便利でしょう。

【答】 「這入る」という語原的意味を考えて「はいる」の訓を整理したのではなく、「入る」と書いて「いる」とも「はいる」とも読めることが文章の中でたびたび出てくるので、それを整理して「入る」とあれば「いる」とだけに読み、「はいる」というときには「はいる」とかなで書くことにすればよいということになったのです。

当用漢字音訓表にもっと訓を

認めるべきでないか

【問】 当用漢字の音訓表を検討してみると、いろいろ取捨してよいと思われるものがある。たとえば、

頭（あたま） 運（はこぶ） 試（こころみる）

などの訓が認められているから、それに見合って

腸（はらわた） 転（ころぶ） 験（ためす）  
などの訓を復活してほしいと思いますが、どうですか。

【答】 「物事」や「文字」は対照したり関連したりしても、それ  
を表わす「ことば」としては必ずしも常に1字1字の音と  
音、および訓と訓とで対照的に使うものではありません。そ  
れゆえ、お示しの例なども出てくるのです。

### 同訓の字の使い分け

【問】 「計・図・量・測」の使い分けについて教えてください。

【答】 このような同訓で類義のものは、いろいろな熟語や句から  
帰納的に考えてください。たとえば、

|   |    |    |     |
|---|----|----|-----|
| 計 | 計画 | 計量 | 計算  |
| 図 | 意図 | 企図 |     |
| 量 | 計量 | 重量 | 容量  |
| 測 | 測定 | 測量 | 測候所 |

どの字を書いていいかちょっと迷うときには、他の人も同  
じく迷うのですから、なるべくかなで書いてください。

音訓の整理では、「はかる」と読むのは「計る」だけにし  
て、その他は音だけにするのが理想的ですが、そこは現実の  
問題として「計る・量る・測る・図る」の4字が残りました。  
それでも「<sup>はか</sup>謀る・<sup>はか</sup>議る・<sup>はか</sup>度る・<sup>はか</sup>策る・<sup>はか</sup>画る」その他の訓は整

理されているのです。

### 「家」の読み方

【問】 次の文の「家」は「いえ」と読ませなければなりませんか。

にいさん、家へ帰ろうよ。

【答】 この場合の「家」は「自家——自宅——うち」の意味ですから「家<sup>うち</sup>」と読ませるべきです。これなどはすぐに「うち」という意味だとわかりますが、どっちかなと迷うような場合がありますから、これからは家はどこにあっても「いえ」と読み、「うち」という場合には「うち」とかなで書くことにしようというのが音訓整理の趣旨なのです。

当用漢字音訓表には、「家 カ・ケ いえ・や」としか、音訓を認めていません。

## (4) 字 体

### 「国」の字について

【問】 わたしは中学生です。「国」という字は、なぜ「くにがまえ」の中に「玉」という字があるのですか。ここに一つの土地があるとしめます。その中に「王」がいてこそ一つの「くに」ができるのではないのでしょうか。わたくしの考えている「くに」という字は国という字で、点はいらないと思います。

【答】 「くに」という字は、あなたにもお考えがおありのように、昔からいろいろな考え方で作られてきました。たとえば、

- 1 或 「一」で地上を、その上の「ロ」で領地・領土をあらわす。それを武力で守る。その武力を戈（ほこ）の字であらわしました。
- 2 國 「或」の字を後に別の意味(あるいは・惑う など)に使うようになったので、それに新しく「くにがまえ」をつけた。それも領土をあらわす。

この「國」が旧字体の「國」の字です。

- 3 囯 「くに」は八方に広く領土を占有するものという意味で、このような字を作ったことがあります。それが日本では水戸<sup>みと</sup>の徳川光圀<sup>みつくに</sup>の名に使われています。
- 4 国 「くに」は王が統治するものだという意味でこの字が作られました。それが日本ではたとえば大阪の「四天王護国寺」という額などに使われています。

「国」と書くのはその「国」の俗字なのです。ちょうど「土」を「土」と書くように。

- 5 國 この案も中華民国で出ました。

以上のように、昔の人は、いろいろな考えをこめて、いろいろな形の「くに」の字を作りましたが、そのうちで、近世では「国」という形がいちばん広く行われました。それで当用漢字字体表では「国」を採用したのですから、皆さんは、

「くに」という漢字は「くにがまえ」に「玉」だと覚えてください。

## 人 名 の 字 体

【問】 公式の書類に人名を書くときには、戸籍にあるとおりの字体を用いなければならないという人がありますが、それはどの程度まででしょうか。

【答】 現在、地名や人名の漢字を官報・公報・新聞その他の印刷物に印刷するときには、当用漢字字体表の字体によって印刷しています。これは、昭和27年に内閣から出された「公用文作成の要領」に、地名の書き表わし方については、「さしつかえのない限り、当用漢字字体表の字体を用いる。」人名については、「人名もさしつかえのない限り、当用漢字字体表の字体を用いる。」とあるからです。

当用漢字字体表が決まるまでは、漢字の字体に標準的なものが公定されていませんでしたので、各人の氏名を公式の書類にのせるときには、戸籍の字体を典拠とするよりほかにはなかったわけです。したがって、以前は官報・公報に印刷するときでも、辞令・学籍簿・履歴書などに書くときでも、人名は戸籍の字体によるべきことが要求されたのです。しかし現在では、公用文作成の要領の規定によって、さしつかえのないかぎり当用漢字字体表の字体を辞令・卒業証書・学籍簿・通信簿などに用いることになっています。

ただし、当用漢字表にない漢字については、標準字体が示されていませんから、以前と同様に戸籍どおり書きます。また、「公用文作成の要領」に「さしつかえのない限り」とありますが、その「さしつかえある場合」というのは、役場の戸籍係が、戸籍を移記したり、謄本や抄本を作成する場合とか、その他特別に厳密性を要求される場合のことです。したがって、一般の日常生活では、人名の漢字を標準字体でない字体で書かなければならないような場合はあまりないわけです。

### 「女」か「𡚦」か

【問】 昨日、父兄として小学校の授業を参観しました。2年の受持先生が黒板に「女」と書いて示したとき、生徒が「先生、その字は違います。「女」は横棒の上に出ています。」というので、先生も教科書を見て、すぐに訂正されました。

字典を見、かつ上級生の本を見ても、「女」は横棒の上に出ていないので、先生のほうが正しいのではないかと思います。もしそうだったら学校へ行って先生に訂正してもらおうつもりです。

【答】 漢字には、縦棒が上に突き抜けるのと、突き抜けないのとで、まるで違った字になるのがあります。たとえば「天と夫」「工と土」など。これらは厳重に注意して、もしまちがったら「誤り」とすべきですが、中にはそうでなく、どちらでも

よいのがあります。たとえば「女と𡚦」「身と身」など。これらの字は最初教えるときに、ちょっとそのことを言い添えてやるほうがよいと思います。

なお、御参考までに付記しておきますと、

- (1) 「女」の字は、昔から突き抜けて書くのが普通でした。だから「女」の草書体から「め」の字（かな）ができたのです。

では、なぜそのように昔から「め」のように書いたかといえますと、その字のもとが𡚦という形だったからです。

- (2) ところが、普通の活字体（明朝体<sup>みん</sup>といひます。）では、それを突き抜けないようにしています。

あなたが字典や上級生の教科書で見たといわれるのは、たぶんその活字体のほうだろうかと思います。そして2年生の教科書で「女」となっているのは、その教科書の字体が手書体を便宜的に活字化した、いわゆる教科書体だからであろうと思われます。

結論として、「女」という1字については、上に突き抜けている字も、突き抜けない字も、どちらも「正しい」字なのです。

はねるかはねないか

【問】 「村」の字の「へん」をはねてもよいか。その「つくり」の「寸」をはねなくてもよいか。

【答】 「はねる・はねない」によって字が違ってくるもの（干<sup>かん</sup>と手<sup>う</sup>）またはその系統字（汗・軒一字）のほかは、はねる・はねないを神経質に気にすることはありません。

### はらうかとめるか

【問】 活字にはらってあるところをとめてもよいか。たとえば「検」の字の最後の画など。

【答】 けっこうです。これは明朝活字<sup>みん</sup>だからはねるのであって、実際の筆写ではとめるのがふつうです。それでさしつかえないということが、当用漢字字体表の注意がきにも出ています。

### 「沸」の略字

【問】 「佛，拂」を「仏，払」として、なぜ「沸」を「汧」としなかったのですか。

【答】 慣用がなかったからです。もし、これからでも「汧」が「沸」の略字として一般化されたならば、そのとき新字体として採用されることがあろうと思います。

「費」の「弗」も、これを「厶」にする慣用がないので、「負」を「費」の新字体には採用してありません。それと同じことです。

## 「母」と「卒」

【問】 「母，卒」をなぜ新字体として採用しなかったか。

【答】 単独に用いられるときの「母」は「母」の形で見なれており，かつ「母」とは別の字だからということで，もとの形が残されました。

「卒」も，「𡵓」の字のたぐいで，「卒翁」などによく使われていますが，とくに「単体」の字としては「卒」のままが無難だろうということで，略字の形が採られませんでした。単独に用いられるときの字については，別に考えたわけです。

## 「北條」と「北条」

【問】 「北條町立」を「北条町立」と書いてさしつかえありませんか。

【答】 さしつかえありません。

「公用文作成の要領」の中にも，とくに「地名の書き表わし方について」の中で次のようにいってあります。

4 さしつかえない限り，当用漢字字体表の字体を用いる。当用漢字表以外の漢字についても，当用漢字表の字体に準じた字体を用いてもよい。

おって，この「公用文作成の要領」は，昭和27年4月4日付内閣閣令第16号依命通知で各省庁に発せられたものです。

(国語シリーズ21「公用文の書き方資料集」参照)

### 「𪛗」と「𪛘」

【問】 「𪛗」または「𪛘」の字が世間で使われていますが、どちらが正しい新字体ですか。

【答】 どちらも新字体ではありません。「𪛗」も「𪛘」も略字です。

それゆえ、原稿や筆記（またはポスターその他）には使われていますが、今日の標準字体としては「職」です。教育上には、これが正式の字であるということを教えてください。その上で略字として使うのは便宜上のことです。

### 「天竜川」と書いてよいか

【問】 ある地図帳（文部省検定済）に「天竜川」とありますが、人名用漢字別表に「龍」とありますから、これは「天龍川」と書くべきではありませんか。

【答】 地名は人名とはちがいます。

そして「龍」は当用漢字表外の字です。

ゆえに一般には「天<sup>りゅう</sup>龍川」と書いても、略字で「天<sup>りゅう</sup>竜川」と書いてもさしつかえありません。「竜」は「龍」の略字として社会に通用しているからです。

## (5) 筆 順

### 筆順の必要性

【問】 筆順を特に教える必要があるか。できあがった字が正しければそれでよいという説もありますが、どうでしょうか。

【答】 筆順は単に習字上のものではありません。れっきとした実用性をもっているのです。

- (1) その字の全体を書き上げる上に、最も順序よく（すなわちむだがなく）筆がはこんで、
- (2) その結果、自然に、できあがった字形もかっこうがよい。
- (3) そうした自然の筆順によると、早く書ける。
- (4) おぼえやすい。

筆順は、そもそも漢字がはじめて造られた時代から、そして現在の字形に定まった時代から、今日まで、ずっと長い間の経験の集積に成ったものですから、それは実はいちばんやさしい書き方なのです。

もし、今のこどもにむずかしいものがあったら、それは改めるだけのことです。

けっきょく、伝統の筆順を無視することも、またそれに盲従することもよくないことです。

なお、筆順というものは、なにもきわだって教えるもので

はなく、日々の板書がそのまま筆順の教育になるべきです。

そのさい、ちょっとひと言・ふた言を言い添えれば、非常に効果的なことかもしれません。

そのへんのところは、先生自身が筆順の本義を身につければ自然に発露するものだと思います。

筆順がいる・いらないと論じるとき、自身で身につけていないところから、なにかそれをよそよそしいもののようを感じているようなことはないか反省したいと思います。

## 習字の筆順

【問】 普通の筆順と、習字における筆順とが違うのはどう処理したらよろしいか。

【答】 筆順を考える場合、草書体の筆順はまったく別のものとして、行書を参考にして考えてください。

その行書にも、草書に近い行書もあれば、かい書に近い行書もありますが、そのかい書に近い行書の筆順と、普通の筆順とは一致しているはずです。

## (6) 画数

「力」は4画か

【問】 「力」は2画だというふうに覚えています、近ごろ4画

だとしている漢和字典を見ました。戦前と戦後とで画数の数え方が違ったのでしょうか。

【答】 中国でも日本でも、戦前・戦後に関わりなく、「力」は2画です。

ただし、なんでも筆画の「方向」を変えるごとに1筆に数えてはどうかという案が戦前からありました。が、それは一般の賛成を得るまでにいたりませんでした。したがってそのような数え方は、一般的な方式ではありません。

### 「糸」「比」の画数

【問】 漢和辞典をひく場合、どの辞典にも「糸」は6画、「比」は4画となっていますが、活字の書体を見ると、「糸」は7画、「比」は5画に数えられます。どう生徒に指導したらよいのでしょうか。

【答】 「糸」の6画は、筆写で「㇏㇏、小」と書いたからです。

「比」の4画も、筆写で「一しーし」と書いたからです。もっとも、古く筆写でも「比」と書いた例があることはあります。それで、けっきょくは「比」の字原が「匕」を二つ並べたものであるということも背景になっているでしょう。

ところが、<sup>みんな</sup>明朝活字には明朝活字としての独得の図案的筆法がありまして、それによって「比」は5画に、「糸」は7

画にも 8 画にも見えるようになっているのです。

教育上では、そのことをありのままに教えておくべきだと思います。

### 「臣」の 画 数

【問】 「臣」の字は普通 7 画に書きますが、なぜ字典の索引には 6 画のところに入れているのでしょうか。

【答】 「臣」の字は、昔から筆順では「㇏」と 7 画に書くのですが、明の時代に始まった画引き字書では、これを「𠂔」と書いて 6 画に入れたのです。それを中国でも日本でも受け継いでいるわけです。

新しい字書では 7 画に入れ、注意として 6 画にも入れておくのが妥当な処置でしょう。

## 4 書式について

「わかち書き」か「分け書き」か

【問】 「わかち書き」というのと「分け書き」というのとありますが、どちらがよいでしょうか。

【答】 この二つとも戦前から使われていまして、「分け書き」というほうが簡単でよいという主張もありました。  
いまのところ、どちらを使ってもよいわけです。

「わかち書き」の種類

【問】 わかち書きには、どんな方式をとったらよいでしょうか。

【答】 これまで、大別して、次の二つの方式がありますが、今日のところでは、小学校の国語教科書には(1)のほうが採られています。

- (1) これは 本だ。(いわゆる文節主義)
- (2) これ は 本 だ。(いわゆる単語主義)

Kore wa hon da.

ローマ字文では、古くは文節主義のものもありましたが、(キリシタン文献)、今日ではすべて単語主義です。それは文字の数にもよることとされます。

## わ き て ん

【問】 文字のわきに，ふりがなのように点や丸をつけるのを何と  
いいますか。

【答】 漢語では「傍点」「圏点」というところですが，それをやさしく「わきてん」「わきまる」といいます。たとえば「傍点筆者」を「わきてん筆者」というように。

なお「傍線」は「わきせん」です。

## ブ レ ヅ

【問】 “——” の記号は何といいますか。文部省の「くぎり符号の使ひ方(案)」にも見えませんが。

【答】 印刷のほうでは「ブレッズ」といいます。英語の brace からきたものだということです。

昔の人は，漢字の「一」を，その形の上から「けいさんかんむり」または「なべぶた」といいましたが，その流儀でいえば，たとえば「ふかしなべのふた」とか「くくり」とかというところでしょう。

## 5 ローマ字について

【問】 日本政府は約50年前に法令によって日本語の書き方をローマ字化したということをきいておりましたが、わが国でもローマ字問題について非常な関心をもっております。ついては貴国の経験された文字改革の詳細を承知いたしたく、もしこの問題に関する報告書が公刊されているなら、それを送ってくださるよう希望します。

【答】 1 日本語は、現在、一般的に漢字と Kana（音節文字）とを混用して書き表わしています。

御書面によると、日本で約50年前にローマ字化を実施したと伝えられているように解釈されますが、その事実はありません。

ただし、日本語を書き表わす一つの方式としてのローマ字つづり方（すなわち、ローマ字による日本語の音節表記法）は決まっています。

御参考のため、別冊「ローマ字問題資料集」（国語シリーズ23）を送呈します。その中の69ページに、そのローマ字つづり方が掲載してあります。

2 なお、御質問に応ずる直接の参考になるかどうかはよくわかりませんが、上記のローマ字つづり方が決まるまでの

経過の概要を別紙に記して、この手紙に添えておきます。

(別 紙)

日本におけるローマ字つづり方が決まるまでの

### 経 過 概 要

- 1 日本では、1860年代から、自国語の表記法に対する改良論が興り、これまで使っていた漢字を全廃して、かな1本にせよという説と、漢字もかなも全廃して、新たにローマ字を採用せよという説とが主張された。そして、その経過処置として漢字を節減せよと説かれた。

政府も、1872年、全国的な義務教育の実施に伴う教科書の編集にあたり、これまでの漢字の無制限な使用について厳に反省を加え、その節減事業に着手した。その後、幾多の曲折を経て、現在では、国民常用の漢字を1850以内の字種に限定している（注）。

注1： その決定までには、日刊新聞社では約 4000～5000の字種を用意していた。

注2： 新たに使用を限定した1850字の中で、特に 881字を選び、これを義務教育（9か年）の期間中に、読み書きともにできるよう指導することが必要であると認めている。

以上は現実に即した改良方策の実施であるが、なにぶんにも文字のことであり、かつ現行の漢字かな混用文が、過去1世紀に近い義務教育を通して全国的に普及しているの

で、その改良事業も一に漸進的方針をとっている。

- 2 その間、1902年、文部省における国語調査委員会では、全面的にフォノグラムを採用すべきことを決議している。

（貴書に50年前うんぬんとあるのは、あるいはこの事実をさしているのではないかと、いちおう想像してみた。）

が、そのフォノグラムというのは、Kana またはローマ字というのであって、そのいずれを専用するかということについては、まず両者の長短・得失を調査すべしということであった。

- 3 これよりさき1850年に、民間のローマ字団体で、日本語の基本音節の表記法を決めた。それは次の2原則によったものである。

(1) 母音字の音価は大陸式によること。

(2) 子音の表記法は英語式によること。

その結果、たとえば [tʃi] の音は “chi” とつづることとなった。これがいわゆる修正ヘボン式で、今日でも広く世界各国に知られているところのものである。

政府も、自然的に——というのは特に公式の声明などをしないで——この方式を対外的文書に用いてきた。

- 4 上記の修正ヘボン式に対して、それは音訳的——すなわち音声転写的——なものである。それよりも、むしろ日本語の音韻（フォネム）および文法的性質を考慮して、独自の方式を立てるがよいという説が起こり、しだいに内外

の学界を動かしてきたが、たまたま1928年、ロンドンで開かれた万国地理学会議において、日本地名のローマ字つづり方を一定されたいという希望決議が日本政府に対してなされたことを契機として、1930年、文部大臣を会長とする「臨時ローマ字調査会」が設けられた。そして、1936年に統一方式を議決し、翌1937年に政府はこれを公布した。それが別冊（上掲）の10ページ所載のものである。

第2次世界大戦後、文部省の国語審議会でも再検討の結果、その方式と実質的にまったく同じ方式のつづり方を確認・決定して、あらためてこれを政府から公示した。それが別冊（上掲）の60ページ所載のものである。なお、これには使用上従来の慣例が許容されている。

- 5 最後に、現代日本語における標準的な発音に対し、上記の国定ローマ字つづり方と、いわゆる修正ヘボン式つづり方と違っているものを対照的に表示しておく。これによって、その国々の言語体系によって少なくとも2様の方式が成り立ち得べきローマ字表記法の立場があることが知られ、そこに、なんらかの参考となるものを貴書に対してお答えすることができるかと思うしだいである。

（発音）      （修正ヘボン式のつづり方）      （国定のつづり方）

|       |     |    |
|-------|-----|----|
| 〔Fu〕  | fu  | hu |
| 〔tsu〕 | tsu | tu |
| 〔ʃi〕  | shi | si |

|          |     |     |
|----------|-----|-----|
| [ʃa]     | sha | sya |
| [ʃu]     | shu | syu |
| [ʃo]     | sho | syō |
| [tʃi]    | chi | ti  |
| [tʃa]    | cha | tya |
| [tʃu]    | chu | tyu |
| [tʃo]    | cho | tyo |
| [dʒi~ʒi] | ji  | zi  |
| [dʒa~ʒa] | ja  | zya |
| [dʒu~ʒu] | ju  | zyu |
| [dʒo~ʒo] | jo  | zyo |

## 6 国語審議会について

【問】 国語審議会ではこれまでどんな問題を取りあげて調査審議してきましたか。

【答】 国語審議会のこれまでにしてきた仕事について、次に概略を述べてみましょう。

- 1 国語国字を改善することの必要は早くから論議されてきました。政府においてもこの問題の重要であることを認めて、明治以来、国語調査委員会（明治35年～大正2年）、臨時国語調査会（大正10年～昭和9年）などを置いて、国語国字について調査をしてきました。

ついで昭和9年、国語に関する文部大臣の諮問機関として官制による国語審議会が設置され、その後昭和24年文部省設置法の制定に伴って改組され、今日に至っています。

- 2 初め、国語調査委員会の時代においては、文字は音韻文字を採用することとし、かな・ローマ字等の得失を調査することをその方針として調査が行われたこともあります。

その後は、日常の言語生活を能率的にし教育上の負担を軽減するためには、漢字・漢語の整理とかなづかいの改定とが必要であるところから、臨時国語調査会等を通じて、主として漢字の問題とかなづかいの問題について、その合

理的な解決をめざして調査審議が行われてきました。

- 3 昭和9年に国語審議会が設置されて以後も、その方針が継承されて審議が行われてきました。終戦後は、特に、漢字の字種・音訓・字体の無制限な使用と、時代の変遷に伴う音韻変化とから生じた国語表記上の困難が、国民の日常の社会生活を不便なものとしているとともに、学習上の負担ともなっていることが、大きな問題として取り上げられるに至りました。

国語審議会は、こういう現実に対面している問題を解決するために、昭和21年、「当用漢字表」（1850字）および「現代かなづかい」を議決答申し、ひきつづき昭和22年に「当用漢字音訓表」「当用漢字別表」（教育漢字881字）を議決答申し、さらに昭和23年「当用漢字字体表」を議決答申しました。

- 4 昭和24年に改組された国語審議会は、まず審議に先だち「国語問題要領」（国語白書）を公けにして、当面解決を要すべき問題の所在を明らかにしますとともに、その審議方針を示し、審議に当っては世論の傾向を推察し、できるだけ実現可能な具体的方策を練ることを建前としました。
- 5 こういう立場から、制定後約10年を経た当用漢字表についてその妥当性を検討した結果、昭和29年、28字の出し入れをした「当用漢字表審議報告」（補正資料）を公けにし、当用漢字表が全体として妥当であることを明らかにし、こ

の案の具体的な内容の実施についても今後の研究にまづこととしました。

さらに、その目標や基盤の上に立っていっそう妥当性のあるものにしていくことが必要であるという立場から、当用漢字表の適用を円滑にする一つの方法として、昭和31年「同音の漢字による書きかえ」を公けにしました。また、法令用語について、その言いかえ書きかえを行って整理しました「法令用語改正例」を、昭和29年に建議しています。その直ちに実施可能のものについてはその実施かたを内閣法制局から各省庁に通知されました。

- 6 また、昭和31年には、「正書法について」という報告で、「現代かなづかい」について広く正書法の立場から検討を加えて、現行のものを妥当なものとして再確認し、その原則の適用上疑問のあるものに理論的解釈を与えました。

なお、正書法に連なる問題としまして、目下「送りがな」について審議を進めています。

- 7 国語審議会は、当用漢字表の審議に当って、固有名詞については法規上その他に関係しますので別に考えることとしました。が、漢字整理の一環として、まず、中国の地名・人名のかな書きの問題について審議し、昭和24年、「中国の地名・人名の書き方の表」を建議しました。

ついで、人名漢字の問題について審議し、社会習慣や特殊事情を考慮して、昭和26年、「人名漢字に関する建議」

（人名用漢字別表）を建議しました。これは、人名に用いる漢字として当用漢字のほかに加える漢字の建議であります。

また、地名の問題について審議し、昭和28年、「町村合併によって新しくつけられる地名の書き表わし方について」を建議しました。なお、国語審議会から昭和27年に建議された「公用文作成の要領」においては、地名の書き方について、「1 地名はさしつかえのない限り、かな書きにしてもよい。」という方針のもとに建議しています。

- 8 国語審議会は、官庁事務能率の増進を図るために、公用文の改善について審議し、昭和25年、「法令の用語・用字の改善について」を建議し、さらに昭和26年には「公用文改善の趣旨徹底について」と「公用文の左横書きについて」を建議し、公用文の具体的な改善の方法を示し、左横書きの促進について建議しました。

ついで、昭和29年には、「法令用語改正例」を建議し、具体的な法令用語の改善を図りました。（5 参照）

- 9 国語の改善は、文字の改善とともに、ことばの面からの改善が必要であり、ことに敬語が複雑でいろいろの問題を含んでおり、特に教育上の基準が必要です。まず、敬語について審議し、昭和27年、「これからの敬語」を建議して、敬語の基準を示しました。ついで、話しことばの改善について、語い・語法にわたって審議し、昭和29年、

「標準語について」を報告し、また昭和31年には「話しことばの改善について」を建議し、ひきつづきこの問題について審議を続けています。

- 10 ローマ字のつづり方については、戦後、いわゆる訓令式・日本式・標準式が行われ、義務教育においてもこの3式のうちのいずれかが選定される状態であり、また一般社会においてもローマ字書きの必要と機会が多くなるにつれて、その単一化が要望されました。そこで国語審議会は、ローマ字つづり方の単一化について審議し、昭和28年に「ローマ字のつづり方」を議決し建議しました。ついでローマ字のわかち書きについて審議し、昭和29年「ローマ字文のわかち書き」を報告しました。また、ローマ字教育について審議し、昭和27年「国語教育におけるローマ字の取扱について」を報告し、ついで昭和29年には「国語教育におけるローマ字教育について」を報告し、ひきつづきこの問題について審議しています。

- 11 そのほか、外来語の書き表わし方について、昭和29年「外来語の表記」を報告し、また、かたかなとひらがなの先習の問題に関連して正書法の立場から審議し、昭和30年「かなの教え方について」を報告しています。

- 12 以上のように、国語審議会は、将来を遠く見通しながらも現実の問題の解決に当り、当用漢字表・現代かなづかい等の一連の国語政策を樹立し、それらをいっそう合理化す

るように努め、また話しことばの改善を図り、常に実現の可能性を考慮しながら、国語の簡易化のために審議しています。

国語審議会は、「国語問題要領」において審議の基準を明らかにし、その基準として、

- 1 義務教育を容易にすることができるかどうか。
- 2 一般の言語生活、特に文字の使用と理解とを能率化することができるかどうか。
- 3 公衆に対する言語として適用できるかどうか。
- 4 文化を創造したり受けついたりするのにどんな影響を与えるか。

という点を特に重視し、国語政策が公正妥当に実施されるように審議に当たっています。



# 資 料



# 1 国号「日本」の読み方について

三 宅 武 郎

## 目 次

- 1 「日本」という国号はいつごろから始まったか……………68
- 2 「日本」の語原的意味はどうであるか……………73
- 3 「日本」を「ひのもと」と読んで  
国号としてはどうかという意見について……………74
- 4 はじめは「ニホン」と発音したか  
「ニッポン」と発音したか……………81
- 5 「日本」の読み方を国家的に決めたことがあるか……………83
- 6 文部省で正式に「日本」の読み方を決めたことがあるか…87
- 7 将来統一の見込があるか……………91

## 1 「日本」という国号はいつごろから 始まったか

これについては、古来、歴史の専門学者の間に諸説があって、今日のところ、まだ定説というものはないようである。したがって、ここにはただ大体のことを紹介しておくだけである。

推古天皇の摂政聖徳太子（摂政593—621）のときには、まだできていなかった（注1）。太子が、外交上、国号の制定を必要とされていたことは史上に明らかなところで、当時、遣隋<sup>ずい</sup>の国書に「日出処<sup>ひでし</sup>天子」または「東<sup>あづま</sup>天皇」と書かしめられたことは、その苦心の現われにほかならない（注2）。その後、大化改新（646）のときに「日本」という国号も制定されたと考えられないことはないが（注3）、その説のよりどころとなっている大化元年、高麗<sup>こま</sup>・百濟<sup>くだら</sup>の使に宣せられた詔の冒頭に「御宇日本天皇」とあるのは、後の令制（詔書式）をいにしえにめぐらした書紀の例の筆法といわれても、一応いたし方のないところがあるので、これはしばらくおくとし、最も確実なところでは、近江令（注4）を修正した大宝令（注5）それをさらに再修した養老令において、とくに外交上の用語（注6）として「日本」の国号が制定されているといえるだけである。そして、その養老令が公布された養老2年の2年後の養老4年（720）に成った国史の第1書には「日本」の名を冠し（日本書紀）、かつその書中、従来の「倭<sup>わ</sup>」の字はす

べて「日本」に書き直して、これを「やまと」と読むべきことを注記してあるから（注7）、ごく大ざっぱにいても8世紀の初頭には「日本」の国号が字面的に確定し、かつ、その読み方は「やまと」であったと言ってよいわけである。

中国でもその時代以後、「日本」という国号を公式に認めて、それまでの倭<sup>わ</sup>の呼称を廃し（注8）、かつそれから彼国の人の詩文にも多く「日本」の語が用いられるようになったのである（注9）。

そして、もとの「倭」は後に「和」の字に書きかえて、和<sup>わ</sup>国・和<sup>わ</sup>歌・和<sup>わ</sup>語・和<sup>わ</sup>訓・和<sup>わ</sup>製・和<sup>わ</sup>英（辞書）などに用いている。また、これに大の字を冠して「大<sup>やまと</sup>和」と読み、大<sup>やまと</sup>和<sup>やまとだまし</sup>魂・大<sup>やまと</sup>和<sup>やまとごころ</sup>心・大<sup>やまと</sup>和<sup>やまと</sup>なでしこなどの語にも用いる。

一面、畿<sup>き</sup>内のやまとの国にも大の字を冠して大<sup>おほやまと</sup>倭・大<sup>おほやまと</sup>和ともいったが（注10）、今日では「大<sup>やまと</sup>和」というふうに一定している。

〔注1〕 聖徳太子の時代にまだ「日本」と熟字した国号がなかったことは、太子の法<sup>ほつ</sup>華<sup>け</sup>義<sup>ぎ</sup>疏<sup>しよ</sup>のそでがきに此<sup>ハレ</sup>是<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>委<sup>ノ</sup>国<sup>ナリ</sup>上<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>王<sup>ナリ</sup>私<sup>ナリ</sup>集、非<sup>ズ</sup>海<sup>ノ</sup>彼<sup>ノ</sup>本<sup>ニ</sup>とあるのによって確証される。

「委」は「倭」の本字であるが、また「倭」の略体と考えるとさしつかえない。

〔注2〕 日出<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>天子<sup>ノ</sup>うんぬんという国書の文句は、わが国の史書にはのっていないで、かえって中国の史書にのっている。

大業三年、其<sup>ソノ</sup>王<sup>タリ</sup>多<sup>リ</sup>利<sup>シ</sup>思<sup>ヒ</sup>比<sup>コ</sup>孤、遣<sup>シテ</sup>使<sup>ヲ</sup>朝<sup>ヲ</sup>貢<sup>ス</sup>。…其<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>書<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。日出<sup>ツル</sup>処<sup>ニ</sup>天子<sup>ノ</sup>、致<sup>ス</sup>書<sup>ヲ</sup>日<sup>ツツガ</sup>没<sup>スル</sup>処<sup>ニ</sup>天子<sup>ノ</sup>ニ無<sup>シ</sup>恙<sup>ミ</sup>云々。帝<sup>ミ</sup>覧<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>悦、謂<sup>フ</sup>鴻<sup>イッ</sup>臚<sup>コウ</sup>卿<sup>ロケイ</sup>曰<sup>ク</sup>、蛮<sup>イ</sup>夷<sup>ハク</sup>之<sup>ノ</sup>書<sup>ニ</sup>、有<sup>ラ</sup>無<sup>レ</sup>礼<sup>ナカ</sup>者<sup>マタ</sup>勿<sup>レ</sup>復<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>聞<sup>スル</sup>（隋

書倭国伝)

隋<sup>ずい</sup>の煬帝<sup>ようたい</sup>の大業3年(607)は推古天皇(聖徳太子摂政)の15年で、その時の使は小野<sup>いもこ</sup>妹子であった。翌年、再び妹子を隋につかわす。

日本書紀(推古16年)には、そのときの国書の文句を次のようにしるしてある。

東<sup>あづま</sup>天皇、敬<sup>て</sup>白<sup>はく</sup>西<sup>にし</sup>皇帝<sup>こうてい</sup>ニ

〔注3〕 本居宣長：国号考

〔注4〕 近江令<sup>おうみりよう</sup>は天智天皇の遺制で、持統天皇(天智天皇の皇女で天武天皇の皇后)の3年(689)に公布された。

〔注5〕 大宝令<sup>たいほうりよう</sup>は近江令を修正改編したもので、天武天皇の5年(大宝元年701)に公布された。しかも歴朝、これを天智天皇の遺制として尊重されているのである。参考：——

近江ノ大津ノ宮ニアメノシタシロシメシ<sup>オホヤマトネコ スメラミコト</sup>大倭根子<sup>オホヤマトネコ</sup>天皇ノ、  
天地ト共ニ長ク、日月ト共ニ遠ク、カハルマジキ常ノ<sup>ノリ</sup>典ト立テ  
タマヒ、敷キタマヘル<sup>ノリ</sup>法ヲ、受ケタマハリテ行ヒタマフ(奈良朝第1代元明天皇の即位の宣命)。

天智天皇、始<sup>は</sup>制<sup>せい</sup>法令<sup>ほうれい</sup>。謂<sup>い</sup>之<sup>を</sup>近江朝廷<sup>おうみてい</sup>之令<sup>のれい</sup>。天下百世因<sup>よ</sup>准<sup>のり</sup>之<sup>を</sup>。(江家次第)

平安朝における十陵の制度では、天智天皇の陵を第一におかれた。それを宣長は慨して、「神武天皇の陵をこそ第一に厚く祭りたまふべく」といっている(古事記伝二十)。

かように考えてくると、この「日本」の国号も、実質的には、

やはり天智天皇の遺制の一つとして、近江令発布の年（689）まで12年をさかのぼって考えてよいとも思われるが、さらに精神的には聖徳太子の遺業だともいってもよいであろう。

〔注6〕 公式令詔書式の「明<sup>アキツミカミトアメノシタシロシメス</sup>神<sup>ミコ</sup>御<sup>ミ</sup>宇<sup>ミ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>天皇詔旨」を  
謂<sup>イ</sup>フコ<sup>コ</sup>ロ<sup>ロ</sup>ハ以<sup>テ</sup>大事<sup>ニ</sup>宣<sup>ス</sup>ル於<sup>ニ</sup>蕃<sup>ばん</sup>国<sup>ニ</sup>使<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>辞<sup>ジ</sup>也」と義解してある。

これは用<sup>モチキル</sup>ニ於<sup>ニ</sup>朝廷<sup>ニ</sup>大事<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>辞<sup>ジ</sup>（即<sup>チ</sup>立<sup>テ</sup>皇<sup>ミコ</sup>后<sup>ミコ</sup>・皇<sup>ミコ</sup>太子<sup>ミコ</sup>及<sup>マタ</sup>元<sup>ハジメ</sup>日<sup>ニチ</sup>受<sup>ケ</sup>ク朝<sup>チヤウ</sup>賀<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>類<sup>ル</sup>）たる「明<sup>アキツミカミトシロシメスオホヤシマ</sup>神<sup>ミコ</sup>御<sup>ミ</sup>大<sup>ダイ</sup>八<sup>ハチ</sup>洲<sup>シュ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ミコ</sup>詔<sup>ミコト</sup>旨<sup>ミコト</sup>」に対するものであるが、その「御宇日本」の読み方いかんによって、日本の国号制定史観に影響してくる。が、そこまではこの小稿ではふれないでおく。

〔注7〕 日本此云<sup>ココニイウ</sup>耶<sup>ヤ</sup>麻<sup>マ</sup>騰<sup>ト</sup>下<sup>ナラウ</sup>皆<sup>ミナ</sup>倭<sup>ヤマト</sup>之<sup>ノ</sup>（日本書紀卷一注）

〔注8〕 大宝3年（703）遣唐使粟田<sup>あわだ</sup>真人<sup>まひと</sup>が、その高潔、神のごとき儀容・進止をもって「日本国<sup>ニッポン</sup>使<sup>シ</sup>」と名のり、唐廷（時に則天武后の長安3年で国号を周と称した。）の君臣・上下をして歎美おくあたわざらしめたうちに、よく「日本」の新国号を承認せしめたと認めてよいであろう（文武紀）。中国の正史（新旧の唐書）でも、このときの記事から旧来の「倭国伝」が「日本国伝」にかわっているのである。

勅日本国王主明<sup>スメラミゴト</sup>樂美御徳（勅書案：張九齡——玄宗の時代）

日本国<sup>ニッポン</sup>者倭<sup>ヤマト</sup>之<sup>ノ</sup>別種也。以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>国<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>日<sup>ニ</sup>辺<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>日本<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>名<sup>ト</sup>。或<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>、倭<sup>ノ</sup>国<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>惡<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>雅<sup>ナラ</sup>、改<sup>メ</sup>為<sup>ス</sup>日本<sup>ト</sup>（旧唐書日本国伝）

日本<sup>ニッポン</sup>古<sup>ク</sup>倭<sup>ヤマト</sup>奴<sup>ヌ</sup>也。…隋<sup>スイ</sup>開<sup>キ</sup>皇<sup>ワウ</sup>来<sup>キ</sup>、始<sup>ニ</sup>通<sup>ツ</sup>中<sup>チュウ</sup>国<sup>ニ</sup>

咸亨元年，遣<sup>レ</sup>使<sup>ヲ</sup>賀<sup>ス</sup>平<sup>ニ</sup>高麗<sup>ヲ</sup>，後<sup>ニ</sup>稍<sup>キ</sup>習<sup>フ</sup>夏音<sup>ヲ</sup>，惡<sup>シ</sup>倭<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>，更<sup>ニ</sup>号<sup>ス</sup>日本<sup>ト</sup>。使者自<sup>ラ</sup>言<sup>フ</sup>，国近<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>出<sup>ヅル</sup>，以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>名<sup>ト</sup>。  
(新唐書日本国伝)

〔注9〕 日本<sup>ノ</sup>晁卿<sup>チヨウケイ</sup>辞<sup>ニ</sup>帝都<sup>ヲ</sup>征帆一片<sup>メグ</sup>繞<sup>ル</sup>蓬壺<sup>ホウコ</sup>明月<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>歸<sup>ラ</sup>沈<sup>ニ</sup>碧海<sup>ニ</sup>白雲秋色満<sup>ニ</sup>蒼梧<sup>ニ</sup> (李白)

送<sup>ル</sup>僧<sup>ノ</sup>歸<sup>ル</sup>日本<sup>ニ</sup> (方千——文苑英華)

〔注10〕 畿内<sup>キ</sup>の大和<sup>ヤマト</sup>の国を古く大和<sup>オホヤマト</sup>とも称したことは倭名類聚<sup>ジヨシヨウ</sup>鈔の国郡の巻に「大和<sup>オホヤマト</sup>於保夜万止」とあるのによってもあきらかであるが，なお，それよりも小さい地方名としても山辺郡<sup>オホ</sup>に大和<sup>ヤマト</sup>があり，これは延喜式所見の古名である。

畿内<sup>キ</sup>の一国，帝都<sup>ヤマト</sup>の所在地としての大和<sup>ヤマト</sup>をも，もとの倭<sup>ヤマト</sup>に大<sup>オホ</sup>の美称を冠して大倭<sup>オホヤマト</sup>と呼び（おそらくは公式的なものであったろう），それを聖武天皇の天平9年12月に大養徳<sup>オホヤマト</sup>ノ国と改め，さらに天平19年3月に再び大倭<sup>オホヤマト</sup>国の旧字に復した（続日本紀）。その大倭<sup>オホヤマト</sup>をさらに大和<sup>オホヤマト</sup>としたのは天平勝宝4年の11月の4～25日の間と推定されている。それは同年11月3日に藤原永手を「大倭<sup>オホヤマト</sup>守」となすとあり（続日本紀），そして万葉集19巻（4277番）の歌の作者を「大和<sup>オホヤマト</sup>ノ国守藤原永手」とあるのによる（本居宣長：国号考和の字の項）。

日本書紀には畿内<sup>ヤマト</sup>の大和<sup>ヤマト</sup>にも日本の字をあてている。たとえば日本<sup>ヤマト</sup>ノ国<sup>ミムロ</sup>之三諸山（神代巻）など。その他，神日本磐余彦尊<sup>カムヤマトイワレヒコノミコト</sup>や日本武尊<sup>ヤマト</sup>の日本もそれである。

## 2 「日本」の語原的意味はどうであるか

聖徳太子の「日出処」というのとまったく同じ意味である。けれど「日本」は「日のもと」であり、その「もと」は「源」の<sup>みなもと</sup>「もと」と同じ意味である。すなわち「みなもと」は<sup>みなもと</sup>水之原＝<sup>み</sup>水<sup>なもと</sup>之本の意味である。元来「源」は「原」が本字であり(注11)、それに後世サズイをつけたのであるが、あたかも「然」ですでに「もえる」という意味の字であるのに、さらに火へんをつけて「燃」としたようなものである。そして「原」は「本ナリ也」と訓じて、すべて「もと」すなわち物の本原という意味である。そこで漢和大字典に「源」は「水泉の流れ出づる<sup>もと</sup>本、みなかみ。」と解釈してあるが、これに準じて説けば、「日の本」は「日の出づる本、ひなかみ。」というわけである(注12)。つまり水源地に対する日源地ともいうべき心持での「日出処」というのが、すなわち「日本」という熟字の意味だと考えてよい。それもひっきょう日本人に自ら東方日出の国にいるという自覚があり、おのずから「日の本のやまとの国」と歌い上げた高まいな気はくにもとづくのであろう(注13)。

もっとも「日の本」というのは「やまと」のまくらことばであって、それだからこそ「春日のかすが」「飛鳥のあすか」から「<sup>かす</sup>春日」「<sup>あすか</sup>飛鳥」という熟字訓の用法ができたのと同じ趣で、これも「<sup>ひのもと</sup>日本のやまと」から「<sup>やまと</sup>日本」という熟字訓もできたのであるとし、はじめから「日の本」という国号があったというわけではな

い（もしそういう語があったとしたらそれは先住民族に関係のある称呼であろう）。

〔注11〕 「<sup>けん</sup>原」は、もと「<sup>がけ</sup>厂」の下に「泉」を書いた字で、そのナカヅクリの「泉」は実は「泉」の字が略された形である。また「燃」も「然」の下にヨッテンが火であることが忘れて、それにさらに火ヘンをつけて、火にもえるという意味がよくわかるようにしたのである。

〔注12〕 「みなかみ」が「みなもと」よりも語感が古いように、「ひなかみ」が「ひのもと」よりも語感が古い。それは「みなかみ」および「ひなかみ」が「みなもと」および「ひのもと」よりも1時代古くおこなわれた語であるということを暗示しているのであろう。

〔注13〕 万葉集三（319 番）詠不尽山歌

ひのものと の やまとのくにの しづめ  
日本乃 山跡国乃 鎮とも ゐます神かも 宝とも なれる  
山かも <sup>するが</sup>駿河なる 富士の高嶺は 見れどあかぬかも

### 3 「日本」を「ひのもと」と読んで国号と

してはどうかという意見について

これから新しくそう読むことにきめればともかく、これまでのところでは「日本」は「ニホン」または「ニッポン」と音よみすべきである。

日本の国家統一は大和朝廷の力によるもので、しぜん「やまと」というのが統一国家の総名ともなったのである。ところが、それ

に対して古くから「倭」の字をあて、さらにこれに「大」の字をつけて「大倭」とも書いて「おほやまと」と読んでいたのを、後に「日本」という熟字にかえたまでのことであるから、その当時はもとのままに「日本<sup>やまと</sup>」と読み、一面、字音では「日本<sup>にほむ</sup>」というようにも読んだことであろう。早い話が日本書紀の書名など、おそらく音よみしたのではあるまいか。

後世、歌ことば（または文<sup>ふみ</sup>ことば）としては「日本」を「日の本」といっているが(注14)、実際の話しことばとしては「日の本」とはいわなかったらしい。その点、神皇正統記にはっきりと「ひのもと」とは読まずといっているのは鉄案である(注15)。いやそれどころでなく、ある時代には、実際の話しことばとして「ひのもと」といえば、それは意外にもエゾのことであったのである。

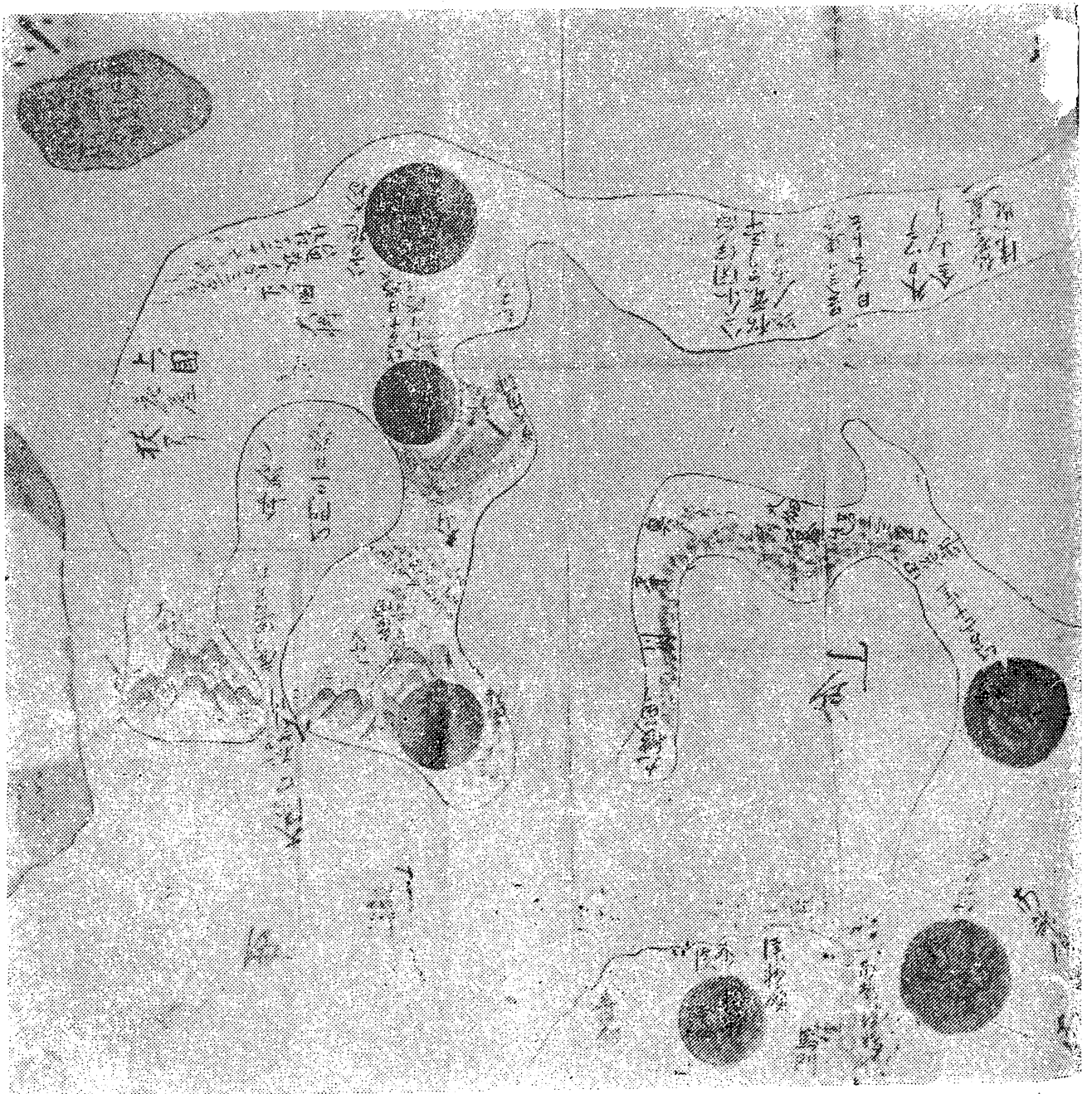
小だわらのことは、くわんとう・ひのもとまでのおきめにて候  
まま、ほしころしに申つく可<sup>べ</sup>候間、としをとり可申候。（豊太  
閣真蹟集第25葉一ワキマル筆者）

これは秀吉が例の自ら「てんか」（殿下のかながき）と署して京都なる「大まんどころ」（夫人の大政所）あてに送った天正18年「5月1日」づけの手紙の1節である。この「くわんとう・ひのもと」の「ひのもと」とは、関東に対して関東以北の地、むしろ北辺エゾの地までを含めていると解釈するよりほかに道がないようである(注16)。

大日本地名辞書所引の史料によると(注17)、むかし津軽の安東（または安藤と書く）氏が、エゾを征討した功によって、日本将<sup>ひのもと</sup>

軍（または日下<sup>ひのもと</sup>將軍と書く）と呼ばれている。

人国記というのは元祿年間に世に出た諸国風俗物語であるが、その陸奥の国の条に「コノ国ノ人ハ、日ノ本ノ故也(注18)、色白クシテ眼ノ色青キ事多シ」とある。



寛文蝦夷図 《国史館蔵》

函館図書館蔵の寛文蝦夷図には、松前から30日行程のところに「是ヨリ東ノ方、日ノ本ト云<sup>イノ</sup>」とあるが(注19)、それを今日の地図に引きあててみると、ちょうど日高の国あたりにあたっているのは、はたして偶然の一奇であろうか(注20)。

北海道の古名は越<sup>コシノワタリ</sup>渡島である(文武紀)。また越<sup>コシ</sup>ノ洲<sup>シマ</sup>である。(古書記)。その越は越の通音で、そのヲチ島<sup>ヲチ</sup>がヲ島<sup>しま</sup>となって、後に渡島<sup>ヲシマ</sup>(日本紀古訓)と読むようになったものと考えられる(注21)。

さてエゾには古く大別して3種があった。すなわち景行紀にい  
わゆる津軽エゾ・ニギエゾ・アラエゾ、または諏訪大明神絵詞<sup>すわ</sup>  
(続群書類従第3集所収)にいわゆる渡り党・日の本・カラコなどである。大日本地名辞書に種々の伝説を合考して、

狄種<sup>てき</sup>の一に、中古、ヒノモトてふ者の存在せるを会得するに  
足らん。(北海道6ページ)

といっているのはけだし動かないところであろう。また倭訓栞  
にいう。

俗諺に、奥州日の本の称あるは、日本紀に、東夷之中、有<sub>二</sub>  
日高見国<sub>一</sub>といへる意なるべし。

その他、金田一博士の説など(注22)。

これらの資料によって考えると、上記、秀吉のいわゆる「ひの  
もと」とはエゾの種族名ないし地名であること疑いないが、それ  
はあるいは当時の東日本的な方言であったのではあるまいか。そ  
して方言こそは生きた話しことばであって、その点、上記の歌こ  
とば(または文ことば)としての「日の本」とはまったくその性

格を異にしているものである。

かつて、中央語（すなわち標準語的なもの）としては、エゾはエゾであり（今日アイヌというように）、それを「日の本」とは恐らく一般にはいわなかったのであろう。そしてもし「日の本」といえば、それは国号「日本」の歌ことば（または文ことば）としての修辭的表現にすぎないものであった。そして、真に生きた話しことばにおける日本の国号は、むかしは「日本<sup>やまと</sup>」であり、中古以後は「日本<sup>にほん</sup>」または「日本<sup>につぽん</sup>」であったと思われる。かくしてわが「日本」の国号は、その文字どおりに「日の本」すなわち「日の出づる処」という意味であって、それは8世紀の初頭（実質的には7世紀の末か）にできたものであるにしても、その思想的ないし歴史的な源は意外に遠く、かつ意外に深いものがあるかもしれないと思われる。が、それはもう筆者などの立ち入るべき領域ではないので言及をさしひかえる。

されば「日の本」とは、歌ことば（または文ことば）としては別であるが、話しことばとしてはエゾを意味する1種の時代的方言であるので、標準語としての日本の国号は、古語では「やまと」であり、中古以後では「日本」を音よみにした「ニホン」または「ニッポン」である。それがすなわち国号「日本」の読み方における標準語的性格ともいうべきものであろう。

〔注14〕 ひの<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>にはさらに御覧じうることなし。

（源氏物語薄雲）

いとむつかしきひの<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>の末の世に（同若紫）

わが国は天照る神の末なれば日の本としもいふにぞありける

藤原良経（玉葉集）

日のもとに咲けるさくらの花みれば人の国にもあらじとぞお

もふ

平兼盛（拾遺集）

〔注15〕 字のままにひのもととは読まず、やまとと訓ぜり。（神皇正統記神代）

また本居宣長も同説である。

比能母登<sup>ヒノモト</sup>といふ号は古の書に見えず。日本<sup>ニホム</sup>といふは、意はその意なれども、もと異国へしめさむために設けたまへるなれば、ひのもととはよまず、始めより爾富牟<sup>ニホム</sup>と字音にぞいひけむ。（国号考）

ちなみに「本」の n 韻を m 韻に読むことは、任那（任nin）を mi mana, 小野妹子<sup>いもこ</sup>（imoko）を因高<sup>いもこ</sup>（因in），文（fun）をfumi とするの類で、くちびる音の盛行した時代があったことを物語るが、その流れの一つの現われと見てよいであろう。

〔注16〕 秀吉は同じ小田原陣からの消息（豊太閣真蹟集第24葉）に、国号の「日本」を「二ほん」と書いている。また他の消息（同上第18葉）には「にほう」と書いている（その「う」は「ん」の音——この「ん」は〔ng〕にあたる——を示す）。一面、秀吉の右筆が書いた組屋文書（推定文祿5年の5月18日づけ）には「につほん」とあるから、たぶんかれらも「ニホン」と「ニッポン」とを両用していたのであろう。

それにしても秀吉が国号の「日本」と奥州「ひのもと」とを

区別していたということは注意されてよい。

〔注17〕 大日本地名辞書4716—7 ページ，同北海道6 ページなど。

〔注18〕 史籍集覧第17集所収，伴信友校本。この「故也」は「故ニヤ」の意か。板本には単に「に」とある。

〔注19〕 函館図書館蔵。写真は昭和13年9月21日同館（岡田健蔵館長）から恵与されたもの——ここに深く感謝の意を表する。

〔注20〕 松浦氏命名案内（大日本地名辞書240 ページ所引）参照。

〔注21〕 これは私見の渡島語原説である。

〔注22〕 金田一京助：蝦夷と日高見国（大正15年刊「アイヌの研究」所収）ちなみに「みなもと」と「みなかみ」とが一对の同義異語であるように，この「ひのもと」と「ひなかみ」ともまた一对の同義異語である。そして「ひなかみ」が「ひたかみ」ないし「きたかみ」の名で，はじめ大和（大倭日高見<sup>おほやまとひだかみ</sup>国一大<sup>おほ</sup>祓<sup>はら</sup>詞<sup>ひことば</sup>）から常陸（此<sup>ひたち</sup>地本<sup>ちもと</sup>日高見<sup>ひたかみ</sup>国也一常陸風土記）に東遷し，そこから針路を転じて東北，北上川の流域（東夷之中有<sup>ニ</sup>日高見国<sup>ニ</sup>一景行紀）へ移動しているが，それがまたふしぎにも，上記の「日の本」の地名が，同じく大和（日本之山跡国<sup>ひのもと の やまのくに</sup>一万葉集——このまくらことばも地方の大和の名とともに全国的な総名になったのではあるまいか。）から東北（秀吉の関東<sup>ひのもと</sup>とまたは津軽の<sup>ひのもと</sup>と將軍）へ，そこからさらに海を渡って北海道・千島へと，しだいに移動して行ったのと常に形影あい伴っている。これは，あるいは「日の本」の民族的移動のあとを示すものとも見られるであろう。

#### 4 はじめは「ニホン」と発音したか

##### 「ニッポン」と発音したか

それは未詳であると答えるよりほかはない。

ただ、ここで一言注意しておきたいことは、日本語のハ行子音が古くは p 音であったという説の一端だけをきいて、まん然と「日本」もはじめは「ニッポン」と読んでいたのであろうというように考えることが誤りであるということについてである。

なるほど、ハ行子音が古く p 音であったということは、今日、ほとんど学界の定説となっているが、その〔p〕から〔f〕への移りかわりの時代については、まだ明らかにされていない。すなわち、あるいは奈良朝以前と想定し(注23)、あるいは奈良朝を転換期かとし(注24)、あるいは奈良朝またはそれ以前かとしているのである(注25)。だいたいにおいて伝統的な国語学者は奈良朝における p 音の盛行を疑っているのであって、おそらくそれが正しいであろう(注26)。そして「日本」の国号制定が奈良朝の初頭または直前にあたるのであるから、いきおい、これまでのところでは「ニッポン」説は影がうすいのである。ただし反対に「ニッポン」説を採っている新しい意見もあるし(注27)、そのへんの消息はやはり未詳といっておくべきであろう。

〔注23〕 上田万年：P音考（明治36年刊「国語のため第二」所収）

〔注24〕 安藤正次：古代国語の研究（大正13年刊）

〔注25〕 橋本進吉：波行子音の変遷について（昭和3年刊「岡倉

先生記念論文集」および昭和25年刊「国語音韻の研究」所収)

〔注26〕 私見では、もっとさかのぼった時代まで疑っている。

「日本」の読み方なども「涅槃<sup>ねはん</sup>」の例で、どちらもはじめから「ネッパン」「ニッポン」ではなくて「ネハン」「ニホン」であったのではないかと考えている（その「ン」の発音は別の問題として）。

〔注27〕 岩井大慧：日本国号私見（昭和14年刊「東亜学第1集」所収）

吉田澄夫：室町時代以降における国号呼称（昭和19年刊「橋本博士還暦記念国語学論集」所収）

ところで、奈良朝以前のことはしばらくおき、平安朝にはいつてからはどうかというに、それはもうほとんど学者の間で異論なく一般的に「ニホン」であったろうと考えられている。そして、それから院政・鎌倉と過ぎて室町時代になると、新興の東国的発音によって「ニッポン」ということが多くなり(注28)、さらに戦国の世を経て織豊時代になると、その傾向がいっそう強くなったのではあるまいかと考えられている。当時のキリシタン文献によってみても、ローマ字書きでは Nippon のほうが Niffon または Nifon よりも、断然、多いようである(注29)。そして新村博士その他の研究によれば〔f→h〕の変化は江戸時代にはいつてからである(注30)。

しかも、旧来の「ニホン」「ニッポン」という二つの発音は絶

えることなく、たとえば漢字をめぐる音と訓とのような関係で、国号「日本」をめぐる二つの読み方として久しく国民の間に用いられて今日にいたっているのである。

〔注28〕 一般につまる音便が中央語にあらわれた時代である。

〔注29〕 前掲、岩井大慧「日本国号私見」および吉田澄夫「室町時代以降における国号呼称」参照。

〔注30〕 新村出：波行子音の変遷に就いて（東亜言語志叢考）

## 5 「日本」の読み方を国家的に決めたことがあるか

それはまだない。それについて重要な参考となるのは、憲法における「日本」の読み方について、先年、帝国憲法改正の委員会で井上（徳命）委員から質問があり、それに対して金森国務大臣から答弁があった。これはいろいろな意味で記録的なものであり、かつ委員会の議事録は広く一般には読まれていないので、この機会に転載しておくことが有益であると思う。

昭和21年7月12日（第10回）

○金森国務大臣（上略）日ト本ト国トヲ書キマシテ、之ヲ我々ガ読ム時ニ「ニホン」国ト読ムコトモアルシ「ニツポン」国ト読ムコトモアルト云フコトハ、我ガ国ニ於キマシテ通念トシテ認メラレテ居ル所デアリマス。其ノ二ツノモノニ遽ニ區別ヲ付ケル必要ガナイ、若シモ是ガ、此ノ二ツノモノノ中ノドツチガ宜イカト云フコトヲ決メル、慣習的ニドチラカヲ助長発達セシム

ベキモノデアルトスルナラバ、今後、特ニ十分ナル研究ヲ積ンデ宜カラウ、斯ウ考ヘテ居リマス。現在見マシテモ、国民ノ声ガ自然ニ現ハレテ来ル地名等ニ付テ見マシテモ、「ニホン」橋ト言ツテ居ルトコロモアレバ「ニッポン」橋ト言ツテ居ル所モアリ、「ニッポン」銀行ト「ローマ」字ニ書イテ居ル所モアレバ「ニホン」銀行ト「ローマ」字ニ書イテ居ル所モアリマシテ、之ニ依ツテ特別ナル不自由ハ生ジテ居ナイヤウニ思フノデアリマス。日ト本ト書イテ「ニホン」ト読メルノカ読メナイノカ、是ハサウ云フ方面ノ学説ニ聴カナケレバナリマセヌケレドモ、私共ノ確カニ知ツテ居ル知識ニ依リマスレバ、日ト本トヲ書イテ「ニホン」ト読ムト云フコトハソソナニ不思議ナコトデハナイ。（中略）随テ今御答ヘ致シマス所ハ、今日ノ所デハ何レトモハツキリ決メテ居リマセヌ。ドチラデモ宜シイ、斯ウ云フ態度デ居リマシテ、尚ホ御教ヘヲ受ケマシテ然ルベキ方向ニ動く機会ヲ作りタイ、斯ウ考ヘテ居リマス。

さらに、この機会に、いま一つ議会の記録を転載しておきたい。それはさかのぼって昭和14年の第73回帝国議会の建議委員会における佐藤（与一）議員提出の「我が国号ノ称呼統一ニ関スル建議案」に対する樋貝政府委員の答弁である。そこに多少とも内容にふれた点が見られるからである。

○樋貝政府委員（上略）昨年ニ於キマシテモ内閣方面ヤ外務省ヤ文部省方面トデ共ニ此ノ研究ヲ進メテ参リマシタ。此処ニ研究ノ結果ガ沢山ナ書類ニナツテヨリマスガ、何分ニモ今仰セラレ

タ通りニ事が相当重大デアリマシテ、（中略）之ヲ公ノ機関ニ掛ケテドウ云フ風ニ決スルト云フ所マデハ、遺憾ナガラマダ参ツテ居リマセヌ。引続イテ是モ解決致シタイト云フ考ヘデ居リマスガ、（中略）唯其ノ内容ガ、当方ニ於キマシテモ、「ニツポン」トスベキカ「ニホン」トスベキカト云フヤウナコトニ付キマシテハ、余程考慮致サナケレバナリマセヌ。今マデ研究致シマシタ所デモ、先ヅ沿革的ナト申シマスカ、我国古来発達シテ参ツタ過程ニ顧ミマスト、「ニホン」ト云フ発音ノ方ガ相当デアルト云フヤウナ結論ニナリマスケレドモ、一方、外国語ナドノ関係及ビ今日「ニツポン」ト云フ称呼デ相当広ク行ハレテ居ルト云フヤウナ点、ソレカラ或ル場合ニ力強ク表現スル場合ナドヲ考ヘマスト、「ニツポン」ト云フ風ニ発音シタ方ガ相応ハシイト云フヤウナコトモ考ヘラレマス。（中略）サウ云フヤウナ事情デアリマスノデ、内容ニ付テハモウ一步篤ト研究致シマシテ、其ノ上ニ決定ノ方法ヲ執ツテ行キタイト云フ考デアリマス。

さて最後に、政府の公的見解を示した最新の総理大臣の国会答弁を次にかかげておく。最新といっても昭和22年9月20日づけのもので、それは同年8月26日づけ姫井（伊介）参議院議員から提出された「国名正称に関する質問主意書」に対する片山（哲）内閣総理大臣の答弁書である。しかもその文意があらかじめ質問書を見ておかないとはっきりしないところがあるので、それらの二つの文をともにかかげておく。

### 国名正称に関する質問主意書

固有名詞は各国を通じて正しく称えられなければならぬ。然るに国名の称え方が非常に乱れている。例えばアメリカを米国、イングランドをイギリス又は英国などと俗称する如きことであって、これは国際上にも、教育上にもはなはだ当を得ざることである。

一、各国の国名は、今後、正しく<sup>とな</sup>称えるようにすべきではないか。

なお、これについて、日本は、国際的にはジャパンと通称されているが、民主的文化国家として新らしく建設される日本は、今後……

一、日本をニッポン（一略一）と正称せられるように、関係<sup>りよう</sup>方面の諒解<sup>う</sup>を得べきではないか。

### 答 弁 書

各国国名の呼称が統一されることは望ましいのであるが、国際間における用法としては、現に慣行がほぼ確定しており、又法令等においても、できるだけこれを統一してゆきたいものとする。その他の場合における国名の呼称については、強いてこれを統一するほどの必要もないことと思う。

次にわが国名の呼称についてであるが、現在のところ、これを「ニッポン」と読むも「ニホン」と読むも、にわかに何れを誤りとも断ずることはできないと思う。<sup>しかのみならず およ</sup>加之、凡そこの種の呼称は、民族の歴史、伝統等によって<sup>おのずか</sup>自ら定まるべきもので、

これを人為的に固定しようとすることは、必ずしも当を得た態度と称し難いという考え方も成り立つと思う。今日の問題として、我が国名の呼称の変更を関係方面に向って要望することについては、なお充分なる考慮を要するものとする。

以上。これ以後、この問題に関する国会での質問、応答はない（昭和33年2月21日現在）。

## 6 文部省で正式に「日本」の読み方を決めたことがあるか

特別に省議で決めたことはないそうである。ただ、昭和9年3月19日、時の臨時国語調査会において次のような案を議決したことがある。

### 国号呼称統一案

ニッポン又はニホンと呼び来れる国号の呼称は爾今ニッポンに統一すること

ただし固有名称にしてニホンと呼ぶ習慣あるものは従前の通

ニホンバシ    ニホンギ  
日本橋    日本紀の局

又外国へ発送する書類には国号に

Nippon を用い Japan を廃すること。

この決議は、同月22日および23日の新聞・ラジオで大きく報道され、さらに同月25日の東京日日新聞には、同会の幹事、文部省図書局編集課長藤岡継平氏の談話が載っている。その要旨は次のとおりである。

(1) 古式の発音は「ニッポン」と力強く発音していた。したがって日本書紀も「ニッポンシヨキ」と読むのが正しい(注31)。

(2) 従来でも公式にはたいてい「ニッポン」が用いられている。

1 例をあげれば、

Nippon Ginko など(注32)。

(3) Japan など、外国人はともかく、日本人が国号を示すのに用いるべきものではないと思われる(注33)。

これが一般には文部省が決めたものという印象を与えたらしく、今日でもよくそのときの事情をきかれるのである。

〔注31〕 これは疑問である。日本書紀は「ニホンシヨキ」というのが伝承的な読み方である。

〔注32〕 ローマ字書きと、実際の話しことばにおける発音とは必ずしも一致しない。そこにこの問題の難点の一つがある。現に日本銀行でも、その行員は「ニホンギンコー」と呼んでおり、また電車停留所は「ニホンギンコウマエ」として、以前から車掌用語として教育しているということであった(当時の市電青山教習所主任談——昭和9年2月)。

〔注33〕 Nippon が英語とならないかぎり、Made in Nippon では英文にならないのである。この点、各国とも自国語の独立性をもっていることを反省しなければならない。

なお Japan といっても、それは「日本」のひとつの読み方であって、いわば外国方言だと思えばよい(付記参照)。

〔付説〕 ジャパン (Japan) の語原について

ジャパンの語原に関する 200 年来諸家の異説について、それに論理的補正を加えて整理すれば次の 2 説となる。

(1) 北音説・ポルトガル人先称説…マルコ = ポーロの東方見聞録は、あるいは口述の筆記であるといい、あるいは覚書による他人の著作であるともいうが、ともかく版ごとに「日本国」の音訳がちがって、たとえば Zipangu, Zipangri, Gyampagu, Ghipangu, Jipangu などがあるという。いずれにしても北方音（漢音系）よみ「日本国」にもとづいている。ポルトガル人の先称説も、やはりその北音よみとポルトガルの <sup>ジョーク</sup> J のよみ方とが一致し、かつポルトガル人がいちばん早く日本に来たからというのである。この説の代表者は蘭学事始<sup>らんがくことはじめ</sup>の盟主であった前野良沢である。

(2) 南音説・オランダ人先称説…「日」の音は呉音（南方音）で「ニチ」であるが、とくにカントン音では yat [yāt (Wilams) iət (Carlgren)] である。その「ヤ」をオランダ人が <sup>イ</sup> J の字で音訳したのであって、それを、アメリカ人やイギリス人は「ジャ」とよむのだというのである。この説は言海の著者大槻博士の提唱（日本「ジャパン」正訛<sup>カ</sup>の弁——明治 6 年 1 月号洋々社談——復軒雜纂所収）にもとづくものであるが、その中で、第一に博士が「シナ南辺の土音」といってられるのを「カントン音」と推定し、博士が「ポルトガル・スペイン・オランダ等の国人」が「その国字に転写し <sup>ヤパン</sup> Japan と通呼し」といってられるのを「オランダ人」と限定しただけが小見である。（スペイン語の AB では <sup>ホーター</sup> J で

あるから yat を J の字で転写するはずはないと思うのである——  
現に Japon はハーポンである)。

以上2説のうち、今日は第1説が通説。小見は第2説。

昭和2年の第52回帝国議会に、国号「日本」の読み方を「ニッポン」に統一して、来年の天長節から実行してほしいという請願案が出た。これは政府参考資料として可決されている。その後もしばしば議会で問題になったが、昭和6年6月には神戸の小学校訓導から文部大臣に建議したり（同月26日大毎）、こえて昭和8年12月には、京都のロータリークラブで決議したり（9年1月3日大朝）、さらに3月には大阪で「ジャパン」排斥運動をおこしたり（同月3日大朝）などして、一連の「ニッポン」国号統一運動がかっぱつにおこなわれた。

このような世論の上に立って、臨時国語調査会は「ニッポン」の呼称統一案を議決したのであるが、それが昭和9年3月19日におこなわれたということについては、実はその直前（ちょうど1週間前）の同月12日に、日本放送協会の放送用語調査委員会において、かねて審議上の懸案となっていた「日本」の読み方について、ひとまず次のような暫定的決議をした事実と密接な関係がある（注34）。

放送上、国号としては「ニッポン」を第一の読み方とし、  
「ニホン」を第二の読み方とする。

この決定に参加した保科（孝一）委員は、臨時国語調査会の幹

事であり、そして前記の国号呼称統一案の起案者でもあったのである。

もっとも、右の臨時国語調査会の決議が「ニッポン」を採ったのは、単に当時の世論に同調したというだけのものではなく、実は文部省が古くから教科書に「日本<sup>につぽん</sup>」とふりがなして教えてきていたことに基くものであり(注35)、あるいは、こうした世論が広くおこってくるくらいに「ニッポン」の読み方が普及したことも、この教科書による長年の教育の結果であるかも知れないと思われるのである。

〔注34〕 放送用語としては、昭和8年、ロサンゼルスオリンピック大会で「ニッポン」が強いからというのでそうした。その当時はアナウンサーもニッポン、ニッポンといていたが、いつの間にかニホン、ニホンというようになったと、当時の東京放送局報道課長が述べている(放送用語調査委員会昭和29年2月6日記録)。

〔注35〕 教科書では、散文では原則的に「ニッポン」とし、韻文では音律の関係で「ニッポン」と「ニホン」とを自由に使っている。たとえば――

<sup>につぽん</sup>  
日本 尋常小学校読本(明治36年刊 48ページ)

ああうつくしや <sup>にほん</sup>日本の旗は 尋常小学唱歌(同年刊1年用) 日の丸の旗

## 7 将来統一の見込があるか

「時」が解決するもの考える。

これまでの統一運動は、わたしの知る限りにおいては、すべてニッポン論者によるものであった。そしてそれは、いつでもすぐに決めよといったようなものであったが、この問題の解決は「時」に待つところが多いものだと思う。もっとも、これまでの統一論者がそういうふうであったのもむりはないのであって、実は、そうしたところに、この「ニッポン」という発音の言語学的性格がはたらいているとも考えられるのである。

「ニッポン」と「ニホン」との言語的性格

- |   |       |      |      |         |
|---|-------|------|------|---------|
| 1 | ニッポン  | 2 音節 | 4 音律 | 強調的     |
|   | ニホン   | 2 音節 | 3 音律 | 中性的     |
| 2 | p(pp) | 破裂音  | 断音   | 唇音 呼気圧強 |
|   | h     | 摩擦音  | 続音   | 遍口音     |

- 3 人間の音声としては発生的に〔p〕が早い。原始的・小児的な音である。

これらの音声学的条件が総合的に反映して、心理的には次のような語感を生じる。

- |       |       |    |       |
|-------|-------|----|-------|
| p(pp) | 外的に浅い | 鋭い | 強く荒い  |
| h     | 内的に深い | 円満 | やわらかい |

ところで、一般に支配層は既成のおとなであったから、どちらかといえば「ニホン」説に同情がある。そこで、もしこれが「ニホン」に統一せよというのであったならば、あるいは今日とは別な結果を示していたかもしれない。

軍人勅諭の読法では、その「日本<sup>にほんこく</sup>国」というふりがなによって「にほん」と一定していた。

「ニッポン」の読み方を主張する論者の間では、いやしくも「日本」という国号に二つの呼法があることは許しがたいもののよう<sup>に</sup>考えられているらしい。が、日本語の語い面においては、音訓二重語い制度の存在することを思わなければならない。

いわゆる音訓二重語い制度とは、たとえば「山・川・草・木<sup>さん せん そう もく</sup>」と「山・川・草・木<sup>やま かわ くさ き</sup>」とのような漢字の音訓併用にもとづいて、そこに1物2名の事実が原則的に存在していることをいうのである。しかも、その音と訓とが必ずしも二つの異なった語原からきたものではなくて、実は古くは同一漢字の音であったものが、時代的な発音の変遷によって、語感上、音と訓とに分化したものがあ<sup>る</sup>。たとえば「絵<sup>かい</sup>と絵<sup>え</sup>」「文<sup>ぶん</sup>と文<sup>ふみ</sup>」「錢<sup>せん</sup>と錢<sup>ぜに</sup>」「州<sup>シユウ</sup>と州<sup>ス</sup>」「奥<sup>オウ</sup>と奥<sup>オク</sup>」などのようなものである。そして、それと同じ現象が熟字の上にあ<sup>ら</sup>われたのが「文字<sup>もんじ</sup>と文字<sup>も じ</sup>」「日本<sup>にっぽん</sup>と日本<sup>に ほん</sup>」などの例であ<sup>っ</sup>て、すなわち「文字<sup>もんじ</sup>」や「日本<sup>にっぽん</sup>」は音（漢語）にあ<sup>た</sup>り、「文字<sup>も じ</sup>」や「日本<sup>に ほん</sup>」は訓（すなわち「やまとことば」的なもの）にあ<sup>た</sup>ると考えてよいのである。

けだし「ニホン」は、今日ならばしぜんに「ニッポン」と読まれるべき「日本」の読み方を、昔（少なくとも平安朝）の時代的発音法にもとづいて、自然に「ニホン」と読んだところから起ったものである。それが、その後（ローマ字書きのある室町時代と思えばまちがいない）に起った「ニッポン」という読み方とともに

伝えられて、これを現代の言語生活の中で併用してみると、そこに一般の音対訓、漢語対和語的な語感上の関係を生じて（注36）、そして、そのどちらもが生きて働いているというのが今日の実態なのである。そこで、わたしたちは、なによりもまずこの「ニホン」と「ニッポン」との二つの読み方を、現代日本語の音訓二重語い制度の中において、そのどちらをも平等の存立として認めるということがたいせつである（注 37）。そうした上で、あらためてこの問題を慎重に考察してみるがよいと思うのである。

〔注36〕 それについて想起することは、現行の観世流謡曲「白楽天」および「善界<sup>ぜがい</sup>」において、日本人には「にほん」と読ませ、中国人（白楽天・てんぐ）には「にっぽん」と読ませていることである。この意識的な読み分けをいつごろからはじめたかは未詳であるが、ともかくそこには「ニホン」の和国的・和語的な語感に対する「ニッポン」の異国的な語感を利用していることが看取されておもしろい。

もっとも、間の<sup>あい</sup>狂言では所作にあわせて「ニッポン」とも「ニホン」ともいうので、とくに和漢の人によって発音し分けることはない、大蔵流の先代山本東次郎氏から、白楽天のそれを所作の実演入りで読んできかせてもらったことがある（昭和9年2月）。

謡曲「白楽天」にあらわれる日本人は漁翁（実は住吉明神）と漁夫とである。また「善界」にあらわれる日本の天ぐは太郎坊で、大唐の天ぐの首領<sup>ぜがいぼう</sup>善界坊なるものは、あるいは世界坊と

いう意味の名であるかも知れないと解釈してみるととき（私見の1語原説），いっそう，その間の消息を感得するであろう。ちなみに善界は是害とも書くが，世は世阿弥の世で一種の古音である。

謡曲「善界」の出典は今昔物語で11世紀なかばのものであり，はやく「ゼガイ」の語原は忘られたとし，サ行の古音に濁るばあいが少なくなかったことは，今日でも雅楽用語で和琴の弦を三（ザン）四（ジ）と呼ぶことによっても考えられる。また正三位という有職よみも宮内省には残っていた。

〔付記〕これはニホンとニッポンとの問題ではないが，先年 Japan を廃して Nippon を世界に向かって主張せよという論があったときに，ロンドンタイムス・ニューヨークタイムスの東京特派員ヒュー・バイアス氏は「ニッポンよりジャパンがよい」という意見を新聞で発表した（昭和9・4・9東日）。その論旨は：

第1に，英語の発音では Nippon の Ni- が Japan の Ja- に比較して弱いということ。

第2に，英語において Nip- という音の連想が卑小であるということ。たとえば動詞の nip をはじめ，nip- のつく名詞など（英和辞典を見よ），新刊のショーター・オクスフォード辞典には1らん半もあるが，そのうち一つとして卑小の連想をもたないものはない。かくして Japan と Nippon, Japanese と Nipponese, ないしは Jap と Nips など，その後者は世界

の漫画家を喜ばしめるにじゅうぶんである。

これに反して Japan の音感は幅が広くて一種の感激をもっている。だから Japan の称呼を排撃して Nippon を主張するのはよくないというのであった（この論の全文が奥間徳一氏の「大日本国号の研究」（昭和 10 年刊）に転載されている。

〔注37〕 将来、いずれか一つを公式の称呼として採用したところで、わが日本語の 1 性格としてそなわっている音律的単位の関係上、それだけを絶対的なものとして他を厳禁するということとはできないと思う。

最後に一言すべきは「日本」のローマ字書きについてである。それは Nippon Ginkō をはじめ、いろいろな会社・団体で、実際の発音および電信などのかながきでは「ニホン」であるが、ローマ字では Nippon と書くというのが比較的が多いことである（昭和 9 年 2 月の調査による）。もちろん Nihon と書く会社名も学校名もあるが、それは Nihon よりも Nippon のほうが書く上では根づよい習慣をもっているということである。これは口ことばでも改まってきかれると「ニッポン」ということが多いのと一脈相通じるものがある。つまり音声でも書記の上でも緊張すれば「ニッポン」となる傾向があるらしい。

最近にもこういう質問があった。

戦争中は「ニッポン」だったが、戦後、平和国家になったので「ニホン」と改称されたということであるが、それはいつ発

表されたものであるか。

いや、そういう事実はないと答えたわけであるが、ともかく「ニホン」と「ニッポン」との間にそうした語感のちがいがあることは、この素朴な質問のうちにもあふれている。

\*            \*            \*

以上、尽きるところなき問題の中に、現今教科書の中で「日本」とあるのはなんと読ませたらよいのであるか。

国家的な決定がまだないかぎり、明治以来の文部省の教科書に見えているふりがなにもとづいて、とくに韻文的音数の関係がなかぎり、いちおう改まっては「にっぽん」と読んでおくという従来の方針に従っておくのが妥当な態度であろう。ただそのさい、これを絶対的な読み方として、歴史的な「ニホン」の読み方を否定するような態度をとってはならないことはあえていうまでもない。それと同時に、これらの子供が大きくなったところに、その「時」における日本人の国語生活の全体的な背景と基盤との上に立って、この一つの問題についても、自然に最善の解決をもたらすものがあるのではないかと思われる。

最後に、この小稿を草するにあたってさまざまな著書・論文から教えられたことを感謝いたします。

## 2 外国人学生の感ずる

### 日本語のむずかしさ

これは、国語審議会の審議の参考として、西本三十二委員が、国際基督教大学の外国人学生を中心として同大学の関係者に日本語のむずかしさについて意見を求めた調査をまとめたものである。

この調査は、話すこと、聞くこと、読むこと、書くことについて、問題別に書いて提出されたもので、かなり詳細な意見のものもあるが、大意を取って類別した。

むずかしい点をあげると同時に、それらの点を外国人の立場から暖かい目で見直し、日本語の普及などについて希望を付しているので、「(日本語の) むずかしい点」「(日本語の) すぐれている点、(むずかしい点と) 相補う点」「希望」の項目に分け、それぞれをさらに問題ごとに分けて、表示した。

算用数字は、意見の提出者16人にかかりに番号を付したものである。同じ番号を対照させることによって、同一人の意見がわかり、その意見がはっきりしてくる。

もちろん、これは、狭い範囲の人々の意見であって、すべての意見が代表されているわけではなく、さらにまた広く深い立場から分析されなければならないが、ここでは、国語問題の一つの参考資料としてそのまま掲げてみた。



| 聞くこと                      | む ず か し い 点  | す ぐ れ て い る 点<br>相 補 う 点  | 希 望  |
|---------------------------|--|---|--|
| 聞 き 方<br><br>発 音          | <p>話し方のむずかしさがそのまま聞き方のむずかしさに通ずる。②③</p> <p>会話がむずかしい。③</p> <p>話し方がはっきりしない。学生に名まえを聞いても、何度も聞いてもらわないとわからない。⑪</p> <p>早口である。③⑭</p> <p>発音特に男子の早く話すときの発音がわかりにくい。②</p> <p>女性には、相手に向かって話すというよりも地面に向かって話すという傾向がある。⑫</p> <p>くちびるを使うことが少ないので、声をのむような印象を与える。それで、語の初めと終りの区別、語自身の区別が困難である。①</p> <p>口をあけないで話し、くちびるをじゅうぶんに使わないで話す。⑧</p> <p>くちびるを動かさないで、どんなことばが用いられているのかわからない。⑫</p> <p>一般にアクセントに欠けているため、アクセントによって語を区別することになれているものにとっては、語を抜き出すことがむずかしい。①</p> | <p>聞き方はわたくしにとっていちばんやさしい。⑭</p> <p>しかしこれは言語自体の問題ではなくて、言い方の問題である。⑪</p> | <p>発音の明せきは、すべての言語で強調されなければならない。⑧</p>   |
| 単 語                       | <p>ことばが短いので、ちょっと早くしゃべるとわからなくなってしまう。⑤</p> <p>音が少ないので言ったことをまちがえる。同音語が多い。(はな・はな, はし・はし, 国歌, 国家, 国花 など。)⑤⑮</p> <p>同音異義語があつてこんざつする。⑩</p> <p>類音語もまちがえる。(くも, くま)⑤</p> <p>術語がむずかしい。③</p>   |   |  |
| 文 法<br><br>文 体<br><br>敬 語 | <p>文の構造が、外国人には心の中で逆転させなければならない。①</p> <p>動詞の主語が何かをいつも考えなければならない。②</p> <p>二重否定。②</p> <p>年齢によって、職業によってちがったことばづかいをするのでその会話を全部理解しようとする、いくつかの言語を学ばなければならない。⑮</p> <p>文の終りに敬語をつけるので、親しいことばがまったくちがったものにひびく。⑩</p>  |   | <p>いろいろのことばが聞きたい。たとえば、歌謡、ラジオ解説、少女のことば、老人のおしゃべり、子供のおしゃべりなど。④</p> <p>日本の文は、ずっと論理的になってほしい。①</p> |

| 読むこと         | む ず か し い 点   | す ぐ れ て い る 点<br>相 補 う 点  | 希 望   |
|--------------|---|---|---|
| 書くこと<br>との関係 | 書くことと同じである。②<br>書くことに関したことは、読むことにもあてはまる。⑧   |   |   |
| 朗 読          | ピッチーアクセントのことを除いては、特別な問題はない。⑭  |   |   |
| 字 体          | 早く書いてある筆跡は読みにくい。②   |   |   |
| 書 式          | 縦書きを読むことがむずかしい。④  | 縦書き左横書きについては、統計表図表の類が多くなっており、それは西洋ふうになっている。西洋では、左から右へ上から下へ読む習慣によって、統計図表はいちばんたいせつなものは左上にくることになっている。このことが、日本の左横書きの論拠となっているが、おもな論拠とは思わない。⑧   |   |
| 表記の体系        | 漢字、ひらがな、カタカナという三つの異なった字を用いる問題。①   |   | すべての国語を通じてたくさんの外来語を含んでいるのだから、カタカナはなくてもよい。「たばこ」のようなひらがなの使い方によってじゅうぶん成功していると思う。①  |
| 漢 字          | 漢字がわからない。それを除いては別に困難はない。⑤<br>たくさんの漢字を記憶しなければならないのが困難である。⑫<br>漢字があいまいである。⑪<br>一つの字にいろいろな読み方がある。⑤<br>同じ漢字が多く違った読み方をするのが、最大の問題である。⑩<br>漢字の読みかえがむずかしい。たとえば、「 <u>所以</u> 」「 <u>台所</u> 」「 <u>場所</u> 」「 <u>近所</u> 」「 <u>所謂</u> 」など。<br>新出漢字は、意味からいっても発音からいっても手がかりがない。①<br>名まえの読み方がむずかしい。②<br>読むことにはまったく興味がない。どんな本も読まない。特に物語は読まない。たいして経験がない。しかし、アメリカのものほどはむずかしくないように思われる。人名、地名特にたくさんの漢字を使った中では、その発音、読み方がわからない。一つの語をどう発音するか、その一定した体系がない。③<br>一つのことばにちょっとした感じのちがいを表わすために、二つ以上の漢字を用いることもへいこうである。たとえば、「 <u>現わす</u> 」「 <u>表わす</u> 」「 <u>著わす</u> 」など。⑬ | しかし、「語」のように一方が意味、一方が音を表わしているのは貴重なことである。①<br>ひらがなとカタカナ以外は読まないで、ほとんど何もいうことはない。もし日本人のように読むことができるためには母国語がローマ字書きだからという簡単な理由だけで、日本語もローマ字書きが好ましい。一方、日本の文字と漢字は古雅で、保存したい日本の伝統の一つである。ローマ字書きの日本語などは考えていない。読めないけれどもその文字が好きである。何ともいえないものを訴えてくる。⑥ | 漢字をもう少し制限する。500字から800字ぐらいにする。その場合、1字1音しか表わさないもの、たとえば、「見る、聞く、読む」などに制限する。⑦<br>もし、漢字がなくなるなら、かな書きだけで習いやすく、何の困難も伴わないだろう。⑪<br>読みかえをなくする。漢字1字は、いつも同じ音を表わす。⑦<br>漢字自身の複雑さ。漢字の簡易化が引続いてなされ、終局的には固有名詞の写し方になんらかのくふうをしてひらがなにとって代られることを希望する。①<br>漢字にはかなをあて町名などや国際的な書き物のときにはヨーロッパふうのアルファベットを用いることを提案したい。⑫<br>すべての標準的な書物には必ずふりがなをつけるように法制化し、ローマ字またはひらがな書きの辞書が編纂され、使用され、外国人が日本文字に対する第一級の知識を得るようにしてほしい。<br>たとえば、かみ KAMI/ 紙<br>かみ KA'MI (神?) など。アクセントを示すしるしをつける。⑬ |
| 送りがな         | 同じ語を書くのに、漢字とかなとの用い方が不統一である。④  |   | 送りがなを統一し、動詞でも名詞でも同じにする。たとえば、「話します」「話し」として、漢字はいつも同じ音を表わすようにする。⑦  |
| 文 法          | 単複の区別のないのも困る。一つのことか二つ以上の物のことかはっきりしないことが多い。⑫   |   |   |
| わかち書き        | 語のわかち書きをしないので読みにくい。⑪  |   | わかち書きをしていないから読みにくいというのは、おそらく自分の語いが少ないからであろう。自分の語いが多いなら、ことばによくなれていて、心の中で切ることができるのであろう。⑪  |

| 書くこと                   | む ず か し い 点  | す ぐ れ て い る 点<br>相 補 う 点   | 希 望   |
|------------------------|--|--|---|
| 読むこと<br>との関係           | 全体としては、書くことの問題は、読むことの問題と同じである。   |  |   |
| 一 般 論                  | 書くことに別に問題はない。⑤<br>日本語は書かない。習ったわずかな文字も書く能力がないのでますますむずかしくなるだろう。⑥<br>書けない。講義中ノートがとれない。⑤   |  | 日本人の教授は、もっとゆっくり話すなり、また、なんらかの方法で外国人を助けるようにしてもらいたい。外国人の教授は、いつも日本人の学生には手かげんしている。③<br>基本漢字 500字を用いた新聞が発行されれば日本に住む外国人がニュースを知るのに役に立つ。もちろん新聞のふりがなは役に立つ。⑬   |
| 書記体系                   | 外国人学生の日本語に対する不平は、漢字を用いることであり少し低い程度でかなを用いることである。⑧<br>漢字を勉強するのがむずかしい。かたかなもまったく新しいときは書いたりするのが非常にむずかしい。④   |  | 書くことは、非常におもしろいので、もっと時間をかけられたらと思う。④  |
| 漢 字 と<br>ふりがなと<br>ローマ字 | 漢字がむずかしい。⑪<br>書くことは必然的に読むことよりむずかしい。漢字を認知するのはやさしいが、それを正しく書くのにはかなりの練習がいる。その音自体が書く形への手がかりを与えない。①<br>漢字は書きにくい。あまりめんどうである。長く時間がかかる③<br>漢字はたいへん覚えにくい。第1に、形が似ているのでまちがえやすい。：賜、財、規、腸、腹など。<br>第2に、読み方がいろいろある。：生＝せい、しょう、じょう、いきる、うまれる、うむ、き、はえる、なま<br>第3に、同音異義語が多い。：西、青、生、世、正、晴…など。②<br>漢字は部分に分解するだけで、学習の体系がない。たとえば、左側がイで始まることばをすべて集めるような方法があるだけである。⑩<br>漢字は、字源のようなその背景なしに覚えるのはむずかしい。④<br>漢字は、忘れやすく、まちがいやすい。逆に書くことやさかさまに書くことが多い。⑤<br>読み方が多いので、書き方がめんどうである。⑤ |  | 漢字を 500字から1000字にへらして、はっきりした意味を持っているものだけに限る。<br>意味のない字にはかなを用いる。⑬<br>日本の文学が広く西欧の人に読まれなければ日本との思想の交換はできない。日本がほんとうに思想の交換を望むのなら、ふりがなを用いて読むことを容易にし、ふりがなを用いた辞書を作らなければならない。⑬<br>基本漢字をローマ字によって並べた、手ごろなポケット辞典を作る。⑬ |
| か な と<br>ローマ字          | 二重子音「け <u>っ</u> この類」長母音「も <u>う</u> の類」がむずかしい。⑭   | かなはローマ字と同じように学びやすい。まずく書いたローマ字よりはかなのほうがやさしい。⑪   | なんらかの形式のローマ字を採用すると、学習が容易になるであろう。⑩<br>かなで外国語を表わすのは便利と思うが、かたかなの代りにローマ字を用いるほうがもっと便利である。書きことばを簡易化する好ましい方法としては、ひらがなを唯一のかなにして、外国語は、ローマ字で表わすようにすることである。⑧<br>かながローマ字によって代えられると、はねる音やつまる音を表わすことができるようになるであろう。⑧   |
| 縦 書 き<br>横 書 き         |  |  | 縦書きも横書きもどれでもよいが統一することが望ましい。⑧  |
| 文 法<br>文 章             | 非常に簡単な問題なら書くことができるが、その書いた文は日本語とはちがっている。もし、試験なら日本語では答えようとしない。③  | 日本語の書きことばはあいまいで不正確だといわれるが、これは日本語自体の問題でなく使用者の問題である。学者の自分の聞いたものを深く見せようとする態度があいまいさをきたしているのである。⑧ |   |

### 3 昭和32年度国語教育研究協議会の記録

#### 〔趣 旨〕

国語の改善と国語教育とは密接な関係にある。よって、国語政策に基づく国語教育上の文字・ことばについての諸問題を研究協議することによって、国語教育の充実発展をはかり、また今後の国語改善方策のよりどころを得ようとするものである。

#### 〔開催地域と日時〕

東部地区（会場——静岡大学）

10月4日（金）、5日（土）

中部地区（会場——富山工業高校）

9月7日（土）、8日（日）

西部地区（会場——長崎大学、長崎東高校、長崎市立片淵中学校）

11月8日（金）、9日（土）

#### 〔各地の状況〕

##### 東 部 地 区

主 催 文部省・静岡大学・静岡県教育委員会

講 演

敬語法と教育 国語審議会委員、学士院会員 金 田 一 京 助

ことばの生活と教育 国立国語研究所長 西 尾 実

児童生徒の読解力と表現力について

静岡大学教授 望 月 誼 三

現在の国語政策について 文部省調査局国語課 天 沼 寧

研究発表と協議

#### (1) 小 学 校 部 会

読解指導——表記を中心として——

宇都宮大学学芸学部付属宝木小学校 高 橋 忠 和

かたかな学習について

静岡県藤枝市立藤枝第二小学校 中川 すみ江  
読解のための文法指導

静岡市立横内小学校 望 月 辰 夫  
作文における語法指導（段落の指導について）

静岡大学教育学部付属浜松小学校 藤 田 秀 徳  
協議題 読解指導 ——表記を中心として——

司 会 静岡県伊東市立伊東西小学校長 土 屋 康 雄  
指 導 静岡大学教授 望 月 誼 三

同 助教授 前 川 清 太 郎

文部省調査局国語課 天 沼 寧

記 録 静岡県指導主事 伊久美 直四郎

## (2) 中学校部会

国語表記について 盛岡市立上田中学校 中 村 義 一

作文指導における推こうについて  
山梨大学学芸学部附属中学校 伊 東 武 雄

文のきりかたの表わし方について  
静岡大学教育学部附属静岡中学校 朝 井 鑽 平

学習指導の立場からみた送りがなの統一問題  
静岡県浜名郡浜北町立北浜中学校 鈴 木 波 男

作文にあらわれた表記の問題  
静岡県富士郡芝川町立稲子中学校 中 村 友 明

国語表記上の基本的問題点の考察  
静岡市立籠上中学校 森 実

協議題 読解指導 ——表記を中心として——  
司 会 静岡県森町立森中学校長 河 合 俊 一

指 導 静岡大学教授 南 信  
同 助教授 岡 田 英 雄

静岡県指導主事 堀 池 敬

記 録 静岡県指導主事 河 西 菊 雄

## (3) 高等学校部会

古文解釈における文論的考察（更科日記を中心として）

静岡県浜松市立高等学校 寺 田 泰 明  
教育文法への批判と提案

静岡県立吉原高等学校 徳 田 政 信  
文法と文のニュアンス

埼玉県立川越高等学校 佐々木 信 治  
入門期における文語文法の指導

静岡県立静岡高等学校 影 山 竹 次  
茨城方言における「じ」と「ぢ」について

茨城県立下館第二高等学校 杉 田 能 信  
協議題 読解指導 ——文語文法を中心として——

司 会 静岡県立気賀高等学校長 西 田 憲 一 郎  
指 導 静岡大学教授 窪 野 桂

同 助教授 植 松 茂  
文部省調査局国語課長 白 石 大 二

記 録 静岡県指導主事 鈴木 武 文  
静岡県立静岡高等学校 吉 川 晴 夫

同 城化高等学校 土 屋 安

#### (4) 全 体 協 議 会

主 題 今後の国語政策について

司 会 文部省調査局国語課長 白 石 大 二  
指 導 参加講師

記 録 文部省調査局国語課 武 宮 り え

#### 中 部 地 区

主 催 文部省・富山大学・富山県教育委員会  
講 演

国語政策の方向

国語審議会会長・芸術院会員・文学博士 土 岐 善 麿  
文法教育の重点

国語審議会委員・東京教育大学教授・文学博士 佐 伯 梅 友  
文学とことば

富山大学教授 大 島 文 雄

## 漢字学習の問題

文部省調査局国語課

塩田紀和

### 研究発表と協議

#### (1) 小学校部会

##### 漢字学習について

京都市立清水小学校

高橋俊二

富山県新湊市立海老江小学校

北川国次

協議題 1 標準語教育について

2 漢字学習について

司会

富山大学教育学部付属小学校

新村作

指導

富山大学教授

和田徳一

文部省調査局国語課

塩田紀和

#### (2) 中学校部会

##### 漢字学習について

富山県中新川郡雄山中学校

真田行雄

##### 漢字学習の困難点について

富山県東礪波郡城端中学校

橋本米次郎

##### 国語表記の実態と問題点

石川県小松市立栗津中学校

蕪城正芳

##### 送りがなについての調査から

富山県西礪波郡戸出中学校

俵正孝

協議題 1 漢字学習について

2 国語表記の問題について

司会

富山県東礪波郡井波中学校長

清原馨

指導

富山大学助教授

松田順吉

文部省調査局国語課長

白石大二

#### (3) 高等学校部会

##### 漢字の語い学習指導資料について

新潟県立新津高等学校

北原戊平

##### 国語表記の問題について

大阪府立住吉高等学校

浜中武彦

漢字調査について

富山県立高岡女子高等学校

増 山 乗 真

- 協議題 1 漢字学習について  
2 国語表記の問題について

司 会

富山県立新湊高等学校長

数 土 寅 雄

指 導

東京教育大学教授

佐 伯 梅 友

富山大学教授

大 島 文 雄

同 助教授

手 崎 政 男

記 録

富山工業高等学校

中 川 昌 保

富山商業高等学校

山 本 作 弘

(4) 全 体 協 議 会

主 題 国語改善と国語教育

司 会

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

指 導

参加講師

記 録

文部省調査局国語課

友 部 浩

西 部 地 区

主 催 文部省・長崎大学・長崎県教育委員会

講 演

文章論の諸問題

東京大学教授・文学博士

時 枝 誠 記

小学校の文法教育

国語審議会委員・京都大学教授・文学博士

遠 藤 嘉 基

文法教育について

長崎大学教授

渡 辺 正 数

国語問題と国語政策

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

公開授業

(1) 小学校（会場 長崎大学学芸学部附属小学校）

1年 どんぐりごま

長崎市立伊良林小学校

峯 ト ミ

2年 小づつみ

- |                        |               |         |
|------------------------|---------------|---------|
|                        | 長崎市立新興善小学校    | 田 中 浩 一 |
| 3 年 山の子ども              |               |         |
|                        | 長崎大学学芸学部付属少学校 | 久 貝 春 夫 |
| 4 年 Ensoku no Hi       |               |         |
|                        | 長崎市立小鳥小学校     | 一 瀬 篤 子 |
| 5 年 本で調べる              |               |         |
|                        | 長崎市立磨屋小学校     | 松 浦 敏 夫 |
| 6 年 よだかの星              |               |         |
|                        | 長崎大学学芸学部付属小学校 | 山 田 喜 孝 |
| (2) 中学校 (会場 長崎市立片淵中学校) |               |         |
| 1 年 ねこのおどり             |               |         |
|                        | 長崎市立片淵中学校     | 増 山 実   |
| 2 年 安寿と厨子王             |               |         |
|                        | 長崎市立桜馬場中学校    | 浦 上 忠 良 |
| 3 年 生まれいずる悩み           |               |         |
|                        | 長崎大学学芸学部付属中学校 | 中 島 栄 一 |
| (3) 高等学校 (会場 長崎東高等学校)  |               |         |
| 1 年 あくがれ (更級日記)        |               |         |
|                        | 長崎県立長崎東高等学校   | 本 田 一 夫 |
| 2 年 生ひさきなくまめやかに (枕冊子)  |               |         |
|                        | 長崎県立長崎東高等学校   | 豊 永 徳   |
| 3 年 国際の民主主義            |               |         |
|                        | 長崎県立長崎東高等学校   | 大 脇 勘 治 |

#### 研究発表と協議

##### (1) 小 学 校 部 会

小学校における読解指導と語法指導

島原市立第三小学校 松 本 巖

小学校における漢字学習の実際

佐世保市立光園小学校 赤 木 武

漢字の学習指導について

長崎市立北大浦小学校 桑 畑 忠 治

協議題 1 漢字学習

2 文法教育（国語表記を含む。）

司 会

長崎市立北大浦小学校長

斉 藤 正 雪

指 導

京都大学教授

遠 藤 嘉 基

長崎大学助教授

稲 田 繁 夫

長崎県指導主事

馬 場 正 徳

## (2) 中学校部会

中学生の自由研究

長崎市立梅香崎中学校

田 中 英 吉

読解過程における文法

長崎大学学芸学部附属中学校

元 村 勉

協議題 1 文法教育（国語表記を含む）

2 文学教育

司 会

長崎市立片淵中学校長

竹 下 忠 吉

指 導

東京大学教授

時 枝 誠 記

長崎大学助教授

河 野 俊 秀

長崎大学講師

西 島 宏

## (3) 高等学校部会

高校における文法教育

長崎県立大村高等学校

林 田 明

文学教育の問題点

長崎県立口加高等学校

中 村 一

協議題 1 文法教育（国語表記を含む）

2 文学教育

司 会

長崎県立長崎東高等学校教頭

平 山 多 馬 喜

指 導

長崎大学教授

渡 辺 正 数

長崎県指導主事

竹 下 哲

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

## (4) 全体協議会

主 題 1 漢字学習

2 文法教育（国語表記を含む）

3 文学教育

|     |                 |       |
|-----|-----------------|-------|
| 司 会 | 長崎大学学芸学部附属中学校総務 | 下 条 進 |
| 指 導 | 参加講師            |       |
| 記 録 | 文部省調査局国語課       | 須之内英夫 |

## 4 国語シリーズ収録資料目録

注 ここには各資料の収録されている本のシリーズ番号を示したので、その書名は、この巻末に付されている国語シリーズ一覧を御覧ください。

### 当用漢字表

|                                       | 巻数 |
|---------------------------------------|----|
| 当用漢字表（昭和21.11.16内閣訓令第7号，同告示第32号）…………… | 21 |
| 当用漢字表審議報告（補正案）（昭和29. 3. 15）……………      | 26 |

### 当用漢字別表

|  |    |
|--|----|
| 当用漢字別表（昭和23. 2. 16内閣訓令第1号，同告示第1号）…………… | 21 |
| 当用漢字別表に関する主査委員長報告……………                 | 14 |

### 当用漢字音訓表

|   |    |
|---|----|
| 当用漢字音訓表（昭和23. 2. 16内閣訓令第2号，同告示第2号）…………… | 21 |
| 五十音順 当用漢字音訓索引……………                      | 21 |
| 当用漢字音訓表に関する主査委員長報告……………                 | 14 |
| 当用漢字音訓表の音訓数……………                        | 33 |

### 当用漢字字体表

|   |    |
|---|----|
| 当用漢字字体表（昭和24. 4. 28内閣訓令第1号，同告示第1号）…………… | 21 |
| 当用漢字字体表に関する主査委員長報告……………                 | 14 |
| 当用漢字字画順表（案）……………                        | 33 |

### 人名用漢字別表

|   |           |
|---|-----------|
| 人名用漢字別表（昭和26. 5. 25内閣訓令第1号，同告示第1号）…………… | 5, 21, 26 |
|---|-----------|

### 同音の漢字による書きかえ

|  |    |
|--|----|
| 「同音の漢字による書きかえ」について（昭和31. 7. 5国語審議会報告）…………… | 35 |
|--|----|

## 漢字の学年配当

|               |    |
|---------------|----|
| 昭和27・28年度調査報告 | 24 |
| 学習漢字学年別配当試案   | 24 |
| 漢字指導語形集       | 24 |

## 地名の漢字

|  |            |
|--|------------|
| 町村の合併によって新しくつけられる地名の<br>書き表わし方について (昭和28.10.8 国語審議会建議) | 19, 21, 26 |
|--|------------|

## 現代かなづかい

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 現代かなづかい (昭和21.11.16 内閣訓令第8号, 同告示第33号) | 21 |
| 現代かなづかいに関する主査委員長報告                    | 14 |
| 現代かなづかいの要領                            | 21 |
| 明治以降におけるかなづかい問題の書目                    | 12 |

## 正書法

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 正書法について (昭和31.7.5 国語審議会報告) | 35 |
|----------------------------|----|

## 標準語

|                |    |
|----------------|----|
| 国号「日本」の読み方について | 37 |
|----------------|----|

## 話しことば

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 話しことばの改善について (昭和31.7.5 国語審議会建議) | 33 |
|---------------------------------|----|

## これからの敬語

|                             |        |
|-----------------------------|--------|
| これからの敬語 (昭和27.4.14 国語審議会建議) | 26, 33 |
|-----------------------------|--------|

## 外国語・外来語の表記

|   |    |
|---|----|
| 学術用語の表記について<br>(昭和27.12.8 国語審議会会長から学術用語分科審議会会長あて回答) | 14 |
|---|----|

## 外来語の表記について（付，外来語用例集）

|   |    |
|---|----|
| （昭和 29. 3. 15 国語審議会報告） .....              | 27 |
| 外国の地名・人名の書き方（案）（昭和 21. 3 文部省国語調査室編） ..... | 27 |

## 公 用 文

|   |    |
|---|----|
| 公用文改善の趣旨徹底について（昭昭 26. 10. 30 国語審議会建議） ..... | 21 |
| 公用文の左横書きについて（昭和 26. 10. 30 国語審議会建議） .....   | 21 |
| 公用文改善の趣旨徹底について（「公用文作成の要領」）                  |    |
| （昭和 27. 4. 4 内閣閣令第 16 号依命通知） .....          | 21 |
| 公用文改善に関する次官会議（決定・申合せ・了解） .....              | 21 |
| 公用文改善事業の沿革（年表） .....                        | 21 |
| 文部省公文書の書式（昭和 25. 3） .....                   | 21 |
| 文部省あて公文書の書式（昭和 28. 11） .....                | 21 |
| 文部省用字用語例（昭和 28. 11） .....                   | 21 |
| 文部省電話のかけ方（昭和 28. 11） .....                  | 21 |

## 法 令 用 語

|  |        |
|--|--------|
| 法令の用語用字の改善について（昭和 25. 11. 7 国語審議会建議） ..... | 21     |
| 法令用語改善についての建議（昭和 29. 3. 25 国語審議会建議） .....  | 25     |
| 法令用語の改善について（昭和 29. 10. 7 次官会議申合せ） .....    | 25     |
| 法令用語の改正の方針（「法令用語改正要領」）                     |        |
| （昭和 29. 11. 25 内閣法制局次長通達） .....            | 25, 26 |

## 国 語 白 書

|  |       |
|--|-------|
| 国語審議会 国語問題要領（昭和 25. 6. 12 国語審議会報告） ..... | 4, 26 |
|--|-------|

## か な の 教 え 方

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| かなの教え方について（昭和 30. 7. 1 国語審議会報告） ..... | 29 |
|---------------------------------------|----|

## 学 術 用 語

|               |    |
|---------------|----|
| 学術用語集序文 ..... | 29 |
|---------------|----|

|   |    |
|---|----|
| 学術用語集まえがき .....                         | 29 |
| 専門用語の統一に関する次官会議申合事項 (和和 29. 7. 8) ..... | 29 |

## ロ　ー　マ　字

|   |           |
|---|-----------|
| ローマ字のつづり方 (昭和 29. 12. 9 内閣訓令第 1 号, 同告示第 1 号) .....        | 23, 26    |
| 小・中学校のローマ字学習について (昭和 28. 8. 31 文初初第 568 号通達) ...          | 19, 23    |
| 通達・報告・訓令・告示・建議・要項等集録<br>(明治 33. 11. 5—昭和 29. 12. 9) ..... | 23        |
| 文献集録 .....  | 23        |
| 会議記録 .....  | 23        |
| 連合国最高司令部指令等 .....   | 23        |
| 文部省ローマ字教育実験調査 .....                                       | 9, 10, 18 |
| 国語教育におけるローマ字教育について (昭和 31. 7. 5 国語審議会報告) .....            | 33        |

## 日　本　語　教　育

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 外国人学生の感ずる日本語教育のむずかしさ ..... | 37 |
|----------------------------|----|

## そ　の　他

|                                |        |
|--------------------------------|--------|
| 国語問題と国語政策について (概説) .....       | 33     |
| 国語改善に関する略年表 .....              | 33     |
| 昭和 30 年度国語教育研究協議会の記録 .....     | 29     |
| 昭和 31 年度           〃 .....     | 33     |
| 昭和 32 年度           〃 .....     | 37     |
| 国語シリーズ収録資料目録 .....             | 33, 37 |
| 国語問題問答 (第 1 集—第 6 集) 総索引 ..... | 33, 37 |

## 国語問題問答 (第1集～第6集) 総索引

### 1 ことばの問題

| 発               | 音        | 集  | 標準語の教育……………         | 5—34       |
|-----------------|----------|----|---------------------|------------|
|                 |          |    | 馬は uma か mma か…………… | 5—35       |
|                 |          |    | 「たっとい」と             |            |
|                 |          |    | 「とうとい」……………         | 5—36       |
|                 |          |    | 「感じず」と              |            |
|                 |          |    | 「感ぜず」……………          | 5—36       |
|                 |          |    | 「表へ出た」と             |            |
|                 |          |    | 「表に出た」……………         | 5—37, 6—16 |
|                 |          |    | あまつさえ……………          | 5—37       |
|                 |          |    | アフルとアオル (煽) ……      | 5—38       |
|                 |          |    | 「まぬがれる」と            |            |
|                 |          |    | 「まぬかれる」……………        | 5—38       |
|                 |          |    | 「ちょうちょう」と           |            |
|                 |          |    | 「ちょうちょ」……………        | 5—38       |
|                 |          |    | 「欠ける」と「欠げる」…        | 5—39       |
|                 |          |    | オオグとオーグ (仰) ……      | 5—39       |
|                 |          |    | オモウとオモ—……………        | 5—39       |
|                 |          |    | 「負って」と「負うて」…        | 5—40       |
|                 |          |    | 「好ましい」と             |            |
|                 |          |    | 「好ましい」……………         | 5—40       |
|                 |          |    | 「かつて」と「かつて」…        | 5—40       |
|                 |          |    | 「落ちる」と              |            |
|                 |          |    | 「落っこちる」……………        | 6—4        |
|                 |          |    | 「わたし」と「わたくし」        | 6—8        |
|                 |          |    | 「川原」は「かわ—ら」か        |            |
|                 |          |    | 「か—わら」か……………        | 6—8        |
| アクセントの          |          |    |                     |            |
| 指導について……………     | 2—43, 6— | 6  |                     |            |
| 「しち」か「ひち」か      |          |    |                     |            |
| (七, 質)……………     | 6—       | 1  |                     |            |
| 「センセイ」か         |          |    |                     |            |
| 「センセー」か……………    | 6—       | 1  |                     |            |
| ダ行音の語とラ行音の語の    |          |    |                     |            |
| 使い分け……………       | 6—       | 3  |                     |            |
| 「落ちる」と「落っこちる」   | 6—       | 4  |                     |            |
| ギリシア・           |          |    |                     |            |
| ペルシアの発音……………    | 6—       | 5  |                     |            |
| 標 準 語           |          |    |                     |            |
| 「きれい」と「きれえ」…    | 1—       | 66 |                     |            |
| 「ニホン」と          |          |    |                     |            |
| 「ニッポン」……………     | 1—95, 6— | 9  |                     |            |
| 「はえ」と「はい」……………  | 2—       | 1  |                     |            |
| 私書箱……………        | 3—       | 8  |                     |            |
| 標準語の用法……………     | 3—       | 35 |                     |            |
| 「うお」と「さかな」…………… | 3—       | 36 |                     |            |
| 「じょうろ」か         |          |    |                     |            |
| 「じょろ」か……………     | 3—       | 36 |                     |            |
| 「国字」の意味……………    | 4—       | 14 |                     |            |

## 敬 語

- 「これからの敬語」について  
て（部会長報告）…………… 1—72  
「社長」と「社長さん」… 1—76  
女子の「～くん」…………… 3—38  
「これからの敬語」  
（全文）…………… 3—59  
お見えになりました…………… 5—41  
「お」のつけ方…………… 6—10  
申す…………… 6—12  
「お申し越し」と  
「お申しいで」…………… 6—13

## 公用文・法令用語

- 旧法令の  
一部改正のときは？…………… 2—41  
公文用語の  
改善の仕事について…………… 3—15  
法令用語改正要領  
（本文）…………… 3—16  
やわらかい官庁用語  
にしてほしい…………… 6—14

## 学 術 用 語

- 学術用語の整理…………… 3—13  
整理の事情…………… 4—26  
「学術用語集」の刊行…………… 4—38  
学術用語と当用漢字…………… 4—38  
「学術用語集」の普及…………… 4—39

## 文 法

- 四段活用か五段活用か…………… 1—69  
文語と口語の混用について 1—96  
文語的語句の混用について 2—43  
「ある」の活用の種類…………… 6—15  
「に」と「へ」…………… 5—37, 6—16  
「できるかぎり」の品詞… 6—17

## 日 本 語 教 育

- 日本語のむずかしさ…………… 6—18

## 国 語 白 書

- 国語問題要領について…………… 3— 4  
「国語問題要領」  
（全文）…………… 3—45

## 2 かなの問題について

### かなの使い方

- 三カ条…………… 1— 5  
かたかなの用法…………… 3—35  
かたかな書きの範囲…………… 5—33  
「三ヶ年」か「三か年」か 6—20

- 鳴き声の「ブーブー」…………… 6—20

### 現代かなづかい

- 現代かなづかい（主査委員  
長報告）…………… 1—48  
かなづかいの意義…………… 1—60

会 津…… 1—63, 2—20, 3—32  
 焼津, 飯塚…………… 1—63  
 助詞「は」「へ」… 1—64, 3—31  
 「ゆう」か「いう」か…… 1—65  
 「とおる」か  
     「とうる」か…………… 1—65  
 「きれい」,  
     「せんせい」…… 1—66, 6— 1  
 「地」は「ぢ」か  
     「じ」か…………… 1—66  
 「はなぢ」か  
     「はなじ」か…………… 1—67  
 「ずつ」か「づつ」か…… 1—67  
 「まちか」か  
     「まじか」か…………… 1—67  
 「世界じゅう」か  
     「世界ぢゅう」か 1—68, 5—26  
 「基づく」か「基く」か… 1—68  
 「魚づくし」か  
     「魚ずくし」か…………… 1—68  
 「腕づく」か  
     「腕ずく」か…………… 1—69  
 次のとおり…………… 1—91  
 呼び声は「おおい」か  
     「おうい」か…………… 2—19  
 大 阪…………… 3—19  
 舞鶴・浅茅が原…………… 2—20  
 国府津…………… 2—20, 3—32  
 ルビのよう音…………… 2—20  
 長音の「お」…………… 3—30  
 「利雄」さんのふりがな… 4—10

「今日は」, 「今晚は」…… 4—11  
 「きうり」か  
     「きゅうり」か…………… 4—12  
 「は, へ, を」の除外例… 5—21  
 「じ・ぢ」「ず・づ」の  
     書きわけ…………… 5—23  
 「藤原」のふりがな…… 5—23  
 「志津子」のふりがな…… 5—25  
 「国旗」は「こくき」か  
     「こっき」か…………… 5—25  
 「ちえっ」…………… 5—26  
 本則ということ…………… 5—26  
 二語連合ということ…… 6—22  
 学界は「がっかい」か  
     「がくかい」か…………… 6—24

## 送 り が な

「基づく」「基く」…… 1—68  
 送りがなについて… 1—86, 3—32  
 送りがなの統一…………… 1—88  
 「当る」と「当てる」…… 1—90  
 次の…………… 1—91  
 「当る」と「当たる」…… 1—91  
 「明かるい」と  
     「明るい」…………… 1—92, 5—28  
 すくなくない…………… 2—21  
 戸締り, 限り, 答え,  
     受取書…………… 3—33  
 「現われる」と  
     「現れる」…………… 5—27  
 送りがなの指導と

|               |      |
|---------------|------|
| 文法との交渉……………   | 5—29 |
| 「書留」か         |      |
| 「書き留め」か……………  | 5—29 |
| 埋める……………      | 5—30 |
| 公用文の送りがな…………… | 5—30 |
| 明治40年刊「送仮名法」… | 5—30 |
| 「返えす」「帰えす」か   |      |
| 「返す」「帰す」か……   | 6—24 |
| 「聞える」か        |      |
| 「聞こえる」か……………  | 6—25 |

|             |      |
|-------------|------|
| 「生まれる」か     |      |
| 「生れる」か…………… | 6—26 |

### かなの学習

|              |      |
|--------------|------|
| ひらがな本位にしたわけ… | 2—42 |
| かなの学習……………   | 4—21 |

### 正書法

|              |      |
|--------------|------|
| 総かな文にはならないか… | 2—41 |
| かたかなの用法…………… | 3—35 |

## 3 漢字の問題について

### 当用漢字

|                |      |
|----------------|------|
| 当用漢字選定の基準…………… | 1— 1 |
| 「使用上の注意事項」の    |      |
| 説明……………        | 2— 3 |
| 当用漢字表の補正……………  | 3— 5 |
| 「猿」の字は必要か…………… | 6—27 |

### 教育漢字

|              |            |
|--------------|------------|
| 当用漢字別表（主査委員  |            |
| 長報告）……………    | 1—37       |
| 漢字と義務教育…………… | 1—43       |
| 教育漢字に「𠂔」「𠂔」  |            |
| は不必要ではないか……  | 2— 8       |
| 漢字の学年配当に     |            |
| ついて……………     | 2—18, 5—19 |
| 音訓の配当……………   | 6—33       |

### 音訓

|                |      |
|----------------|------|
| 当用漢字音訓表（主査委員   |      |
| 長報告）……………      | 1— 7 |
| 1音だけの字……………    | 5— 1 |
| 「菊」は音か訓か……………  | 5— 1 |
| 当用漢字音訓表の音訓数…   | 5—94 |
| 音訓の学年配当……………   | 6—33 |
| 「学」の音訓……………    | 6—34 |
| 「みずから」と        |      |
| 「おのずから」……………   | 6—35 |
| 音訓と熟語のときの意味…   | 6—36 |
| 「入」に「はいる」の訓…   | 6—37 |
| もっと訓を認めよ……………  | 6—37 |
| 同訓の字の使い分け…………… | 6—38 |
| 「家」のよみ方……………   | 6—39 |

### 漢語の読み方

|         |      |
|---------|------|
| 情緒…………… | 1—15 |
| 施行…………… | 2— 1 |
| 施業…………… | 2— 1 |

|             |      |
|-------------|------|
| 世 論         | 2— 1 |
| 世 帯         | 2— 1 |
| 博 士         | 2— 1 |
| 詩 歌         | 2— 2 |
| 砂 鉄         | 2— 2 |
| 富 貴         | 2— 2 |
| 水 郷         | 3—37 |
| 熟語の読み       | 4— 1 |
| 「口こう」と「口くう」 | 4— 2 |
| 「復興」と「腹腔」   | 4— 3 |
| 合評会         | 5— 2 |
| 障 子         | 5— 2 |
| 芸術, 美術, 技術  | 5— 3 |
| 「センセイ」か     |      |
| 「センセー」か     | 6— 1 |
| 連声について      | 6— 4 |

### 漢字の使い方

|              |            |
|--------------|------------|
| 「他」「外」「ほか」   | 1—16       |
| 「来る」の使い方     | 1—16       |
| できる          | 1—17, 5—32 |
| ふぜい          | 2—11       |
| こども          | 5—31       |
| 挨拶・親切・大切・大事・ |            |
| 出来る          | 5—32       |
| 「句読法」と書けるか   | 5—33       |
| 「初」と「始」の使い分け | 6—32       |

### 漢語と漢字

|       |      |
|-------|------|
| 漢語の整理 | 1— 3 |
| 絃と弦   | 1— 4 |

|              |            |
|--------------|------------|
| 「言う」と「云う」    | 1—92       |
| 部首について       | 1—97, 2—16 |
| 年 令          | 2— 9       |
| 12 才         | 2— 9       |
| 冒 険          | 2— 9       |
| 探 検          | 2— 9       |
| 「価格」と「価額」    | 2—10       |
| 「車輛」と「車両」    | 2—10       |
| 「批難」と「非難」    | 2—10       |
| 「排列」と「配列」    | 2—10       |
| しょうゆ         | 2—10       |
| 音のない漢字       | 2—15       |
| 動植物の漢字       | 3— 7       |
| あて字          | 3— 8       |
| 也            | 4— 4       |
| 「寄附」と「寄付」    | 4— 5       |
| 「明瞭」と「明了」    | 4— 6       |
| 「味」と「味わう」    | 4— 6       |
| 「学級編成」と      |            |
| 「学級編制」       | 5— 4       |
| 「繁殖」と「蕃殖」    | 5— 4       |
| 「天守閣」と「天主閣」  | 5— 5       |
| 「埆」という字      | 5— 5       |
| 漢和辞典の部首      | 5— 6       |
| 「交差点」と「交さ点」  | 6—28       |
| 「受験番号」か      |            |
| 「受検番号」か      | 6—29       |
| 「刺げき」か「刺激」か, |            |
| 「率直」か「卒直」か   | 6—29       |
| 「水牛」や「金魚」もかな |            |
| 書きがよいのか      | 6—30       |

「充分」と「十分」と

「じゅうぶん」…………… 6—30

「絶対絶命」か

「絶体絶命」か…………… 6—31

「回復」と「快復」…………… 6—31

## 字 体

当用漢字字体表（主査委員

長報告）…………… 1—18

シンニュウの書き方…………… 1—29

「者」のテン…………… 1—30

教・舎・黄・帰・芸・内・

蔵・旅…………… 1—31

桧…………… 1—33

養…………… 1—33

確…………… 1—33

薄…………… 1—34

様…………… 1—34

棄と肅…………… 1—34

静…………… 1—35

船のへん…………… 1—35

疎のへん…………… 1—98

童…………… 2—12

冷…………… 2—12

夢…………… 2—12

新聞の活字…………… 2—12

旧字体はまちがいか 2—13, 3—25

弍…………… 3—26

海…………… 3—26

総と聰…………… 3—26

急…………… 3—28

しんにゅう…………… 3—28

證と証…………… 4— 6

衆と衆, 純と純…………… 4— 8

当用漢字の行書と草書…………… 4— 9

教科書体活字の

「本」と「木」…………… 4— 9

新字体と字原…………… 5— 8

分…………… 5— 9

吉と吉…………… 5—10

監…………… 5—12

満…………… 5—12

感…………… 5—12

内…………… 5—13

くさかんむり…………… 5—14

しんにゅうの書き方…………… 5—14

悩のつくり…………… 5—15

しんにゅうの画数…………… 5—15

当用漢字字画順表（案）… 5—99

国の字…………… 6—39

女か女か…………… 6—42

はねるかはねないか…………… 6—43

はらうかとめるか…………… 6—44

母, 卒…………… 6—45

「北條」と「北条」…………… 6—45

「力」は4画か…………… 6—48

「糸」「比」の画数…………… 6—49

「臣」の画数…………… 6—50

## 略 字

略字について…………… 1—35, 3—27

新しい略字…………… 5—16

灯…………… 3—27, 5—17  
「沸」の略字…………… 6—44  
転と恥…………… 6—46

## 筆 順

夢…………… 2—12  
筆順の基準…………… 2—14  
新旧字体の筆順…………… 2—14  
筆順のきまり…………… 3—29  
必…………… 3—30  
筆順の必要性…………… 6—47  
習字の筆順…………… 6—48

## 固 有 名 詞

固有名詞と新字体…………… 1—33

人名用漢字について…………… 1—44

地名に使う漢字についての

建議（本文）…………… 2—26, 3—11  
人名用漢字（本文）…………… 3—9  
人名用漢字の字体… 3—10, 6—41  
児童の民名の字体…………… 5—7  
履歴書の字体…………… 5—8  
天竜川…………… 6—46

## 漢 字 の 学 習

書取の

採点について…………… 2—13, 3—29  
門と冂…………… 5—18  
音だけの漢字の指導…………… 5—18

## 4 外国語・外来語

外国語・外来語の

表記について（本文）… 1—77  
アジアかアジヤか…………… 1—82  
中国の地名・人名の書き方  
の表について…………… 1—84  
料・厶・馳…………… 2—9  
外来語の表記法…………… 3—34  
ハンカチかハンケンか…………… 5—42

「あいすけえき」か

「あいすけーき」か…………… 5—43

「ギリシア」「ペルシア」 6—5

「ウインドー」か

「ウインドウ」か…………… 6—21

「オホーツク海」「カムチ

ャッカ」「ウオツカ」… 6—21

## 5 ローマ字

小中学校の

ローマ字学習について… 2—29  
ローマ字つづりと  
現代かなづかい…………… 2—37

ローマ字のつづり方

（訓令・告示）…………… 3—39  
第1表・第2表の使い方… 4—15  
国語教育におけるローマ字

教育について（本文）… 5—63

## 6 書

### く り 返 し 符 号

くり返し符号について…… 3—34

くの字符号…………… 3—34

横書きの「ゝ」…………… 4—12

「々」「ゝ」などの

呼び名…………… 5—44

くり返し符号の使い方…… 5—44

### く ギ リ 符 号

## 7 そ

## の 他

国語審議会について…… 6—58

ローマ字について…………… 6—53

## 式

くぎり符号について…………… 3—33

## 書 式

左横書きについて… 1—93, 2—23

数字の書き「j」…………… 2—22

「わかち書き」か

「分け書き」か…………… 6—51

「わかち書き」の種類…… 6—51

わきてん…………… 6—52

ブレッツ…………… 6—52

国語シリーズ No. 37

# 国語問題問答

第6集

MEJ 4140

昭和33年3月20日 印刷

昭和33年3月25日 発行

著作権所有

発行者

印刷者

文 部 省

東京都千代田区神田小川町1の1

竹 田 光 二

名古屋市昭和区白金町2の8

竹田印刷株式会社

代表者 竹 田 光 二

発 行 所

光風出版株式会社

東京都千代田区神田小川町1の1

電話(23) 2880・振替東京 162599

名古屋市昭和区白金町2の8

電話(8) 2586・振替名古屋 38253

定 価 49 円